
“ 異 ” ・ 日常的風景

ねぎポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“異”・日常的風景

【Nコード】

N9637A

【作者名】

ねぎポン

【あらすじ】

「あの日は何かがおかしかった」母校を突如訪れた謎の“静寂”。そのただならぬ空気の異変に、ある1人の高校生が立ち上がった…。

9月。あの日は何かがおかしかった……。いつものように家を出て、いつものように登校する。何ら変わりの無い、いつものような月曜日……。

学校に到着した。僕は埼玉県立の羽生南高校という所に通っている。全校生徒：約1,000名。近くには市立羽生南中学校があり、そこを母校とする生徒も多い。市立羽生図書館もまた近い。自転車通学の僕は、今日もいつもの自転車で登校した。駅から徒歩で来た生徒が、この残暑にうだりながら涼を求めて昇降口に吸い込まれていく。僕も吸い込まれていった。

1年H組。ここが僕のクラスだ。男子33名＋女子9名＝全42名という多少男臭いクラスだ。僕の通っているこの高校には、県内でも数える程の高校にしか設置されていない、理数コースというものがある。とは言ってもほぼ毎年定員を割ってしまう程の不人気。その為今年度をもって募集を停止する事になってしまった。まあそれはともかく今日のクラスの雰囲気は明らかにいつもと違っていたのだ。それは教室に入った瞬間に直感した。

廊下の個別の小ロッカーの中から鍵のかかった自分のロッカーを開け、弁当と水筒の入った布袋を入れる。勿論その後の鍵かけも忘れない。

僕は教室に入った。室内には珍しく全生徒が揃って座っているが、辺り一面がシーンとなっていて不気味な雰囲気漂っている。あと15分で朝読書が始まる。羽生南高校では、今年度から

「朝読書」

という10分間の読書タイムを実施している。僕は本を開いた。しかし活字が頭に入らない。僕は本を閉じ、隣の席の畔川諒あぜかわ まことに話を掛けてみた。

「畔川君、何で皆黙っちゃってんの？」

「……………」

畔川は答えない。

「何なんだよ……………」

僕はクラスの親友である坂橋正幸さかはし・まさゆきにも同じ質問をぶつけてみた。

「何で皆黙っちゃってんの？」

「……………」

——駄目だ。皆完全にどうかしちゃってる——

朝読書が始まった。僕は改めて本を開く。しかし皆は本を出さない。担任の河西樹成かさい・みきなりが教壇へ…………。しかし皆は一向に本を開こうとしない。というよりむしろ動こうとしない。

——これってもしかして——

僕の脳裏に幾つもの

「もしかして？」

がよぎっていく。

「皆本を出しなさい」

河西が言った。しかしそれにも動じない。河西が左から3番目で右から4番目、1番前の席に着いている坂橋に同様の言葉を掛けた。しかし反応は同じ。河西は坂橋のうつむいた顔を覗き込む。

「この暑さで頭がぼーっとしちゃった？」

その時河西の顔から血の気が一斉に引いたのが裸眼0・3の僕が目から見てもはつきりと分かった（僕の席は1番左の前から2番目）。何と、坂橋の顔は蒼白。河西はガタガタと体を震わせながら教室中を見回した。

「あつ、あつ……」

河西は気絶してしまった。僕も教室を見回す。その時僕は空前絶後の大ショックを受けた。坂橋だけではない、クラスのありとあらゆる生徒の顔が、硬直し、蒼く染まっていたのだ。僕も危うく気絶する所だった。

——しかし何でこんな事になっちまったんだろう？——

静寂に包まれながら僕は思った。

その時、微かではあるが、右斜め後ろの方から僕を呼ぶ聞き覚えのある女性の声があった。振り向くと、そこには硬直した体を一生懸命に動かして何かを訴えようとしている沢辺紘美さわへ・ひろみの姿が。

——何か有力な情報が得られつかもしんない——

僕は立ち上がり、沢辺とは逆の方向に椅子の背もたれを向けた。そして僕は椅子に座り直し、わらをもすぐる思いで沢辺に訊ねた。
「皆、どうしちゃったの？」

沢辺は何か喋っているようだ。しかし声が小さ過ぎて何を喋って

いるのかよく聞き取れない。僕は体を椅子から乗り出し、右耳を沢
辺の口元に傾ける。

Vol. 3 異変 3

「……ねぎポンが…来る…少し…前に……」

「うん。それで？」

「……何か…変な奴が…変な奴が……」

「おい、そいつがどうしたんだ？」

「……」

沢辺は力尽きてしまった。その瞬間僕の胸は孤独感で押し潰された。時計の針は8時40分を指している。

それから5分が過ぎた。他クラスでは朝のSHRが始まっている。ショートホームルームしかしH組は担任である河西が気絶している為いつまで経っても始まらない。河西はその場に放置されたままだ。

——これからどうすればいいんだ？——

僕は途方に暮れながら他クラスのSHR終了時刻を待つ。他クラスの生徒には害は及んでいないはずだ。もしかしたら沢辺の言っていた

「変な奴」

の情報を得る事ができるかもしれない。しかし他クラスで僕の知っている生徒はほんのわずかしかない。小・中と同じ学校を共にしてきたA組の今津葉子とD組の滝谷悦志、いまづ・ようこ たきや・えつし同じ部活に所属しているA組の長田希代実とE組の高野康平の4人。ながた・きよみ たかの・こうへい僕はそれまでの間の硬直した雰囲気の中で考えた。

——とりあえず河西先生をどうにかしなくっちゃ。んでもこの事はあんまり大事にはしたくないし——

僕は揉め事があまり好きという訳ではないのでできれば少人数で解決したい。しかしそれで上手くいくだろうか？SHR終了時刻まであと3分。時の流れの遅さをまざまざと実感させてくる。僕は自分のタオルを流しの水に浸し、それを河西の額に乗つけた。そしてひたすら終了時刻を待っていた。

終了時刻まであと1分。他クラスのSHRが予定よりも早く終わった。他クラスの生徒が続々と廊下になだれ込む。その波はこのH組にもわずかながら押し寄せてきた。……しかし、その生徒達の様子もおかしかった。終始ぼーっとしていて何にも喋らないのだ。まるで魂を抜かれたかのように……。

——どうなってるんだ？さっきまであんなに騒いでいたのに——

Vol. 4 異変 4

おかしい。教室に入る前は確かにいつも通り生徒同士が喋り合ったりしていたのだ。しかし今はこの通り皆おかしくなっている。僕の心の中で、怒りにも似た何かが一気に込み上げてきた。

「くそ……!!」

僕は小さく、しかし力強い声で叫んだ。涙が溢れようとしている。僕はそれを必死で堪え、じっと床を見つめながら教室を出ようとした。その時、

「根岸君!!」

僕の名を呼ぶ声がした。その声に驚いて顔を上げると、そこには高野の姿が。高野は被害を受けなかったようだ。僕は高野に訊ねてみる。

「……E組もやられたの?」

「……うん。ほとんど全滅だよ……」

「ほとんど!?……って事は他に誰か生きてる人がいるって訳?」

「俺が生きてるじゃん」

「……そつかあ。E組もかあ……」

僕は期待を裏切られたようで切なくなった。僕と高野とはあまり親しい仲という訳ではない。しかし今はそれ所ではない。高野と協力していく事にした。

「……これからどうする?」

「……」

高野は何か考えているようだ。8時53分。

「……授業はどうなるんだろう?」

僕はポツリとこぼした。しかし高野からの返事は無い。

——高野君は何を考えているんだろう?——

廊下には僕達2人以外誰もいなくなってしまった。そろそろ1時限目が始まる。果たして授業は無事行われるのだろうか?

予鈴のチャイムが鳴った。いつもなら他クラスは移動で忙しくなる為廊下が嫌でも騒がしくなる。……しかし、それが全く感じられない。

9時。チャイムが鳴り、授業が始まった。僕は自分の席に着いた。1時限目はオーラル・コミュニケーションOC。本来は英会話を学ぶ教科らしいのだが、羽生南高では英文法を教わっている。担当のそのだ・はるお園田晴男は3年生のどこかを受け持っているので園田が教室に入ってくれば他の学年は無事だという事になる。

——さあ園田先生、来るか来るか？——

期待と不安でいっぱいな中、ただひたすら園田の来るのを待ち続ける。

廊下後方から誰かの足音が聞こえてきた。

Vol. 5 異変 5

——蘭田先生か？——

僕は耳を澄ませながら廊下の方向に目を遣る。

——蘭田先生だ！——

間違いない。白髪混じりの灰色頭にしわの刻まれた日焼け顔。蘭田先生だ。僕は胸を撫で下ろすと同時に嫌な予感がしてきた。

「始めます」

シーン。

号令が掛からない。

「始めます！」

シーン。

口を利こうともしない。

「号令は？休み？」

蘭田は学級名簿を見て言った。しかし皆の反応は無い。

「しかも皆、机に何にも出てないじゃない」

蘭田の頭に怒りが込み上げてきた。

「自分はあまり怒る方ではない」

と蘭田はかつて言っていたが、今日は言葉の節々に怒りが組み込まれている。しかしそれでも皆の反応は全く無い。

「……………」

教室内が重苦しい雰囲気包まれた。その雰囲気に僕は何も言えなくなってしまった。

「唯一道具が出ている根岸！このクラスは一体どうなってるんだ！？」

僕は緊張して言葉が出てこない。

「根岸、お前もか」

——この場合、何て答えたらいいんだろう？——
「……………」

「……………」

……… 会話にならない。

—— とうしよう。このまんまじゃ何にも進まないよ——
気持ちばかりが焦ってくる。

「山田^{やまだ}、お前もいつもの元気が無いぞ」

蘭田は照準を山田^{まさし}正司に合わせた。もちろん反応は無いのだが。
「皆一体どうしたんだ？ だらしない。2学期になったんだからそろそろ夏休みモードから抜け出さない。……」

説教が始まってしまった。生徒に悪気は全く無いのに。

—— おゝいゝ。何でこうなっちゃうんだよ？ 早く気付いてくれよ——
く 河西先生の時みたいにく——

「…… 今日の授業は自習！！ 予習をちゃんとやっておくように！」
蘭田は怒って教室を出て行ってしまった。歩きながら一人でブツブツ言っている。

今度の授業に備えて予習でもやろうかと思っただが、それは一気に消し飛んでしまった。

—— 皆の救出が先だ！！——
予習などやっている暇は無い。僕は廊下に飛び出し、高野のいるE組へと向かった。

他クラスも同じだった。生徒が動けず移動は無し。その為移動先の先生がわざわざ教室まで来て何の反応も無い生徒に向かって延々と説教をしている虚しいクラスもあった。

E組。この教室に高野はいる。教室内はやはり静かだった。このクラスも多分やられたのだろう。詳しい事はまだ判らないが……。僕はドアのガラス越しに教室内をこっそりと覗いてみる。どうやらここも先生が出て行ってしまったようだ。僕は教室に入って高野を探す。

E組には高野の他に名倉亜紀なくら・あきという僕の部の活動に協力をしてくれたとても有り難い生徒がいる。といってもいつもはたまに部室に入ってきて他の部員と雑談をしている位のごくありふれた生徒。なので顔は全くと言っていい程覚えていない。

室内を見回していると高野が携帯で暇を潰している姿にぶち当たった。高野はしばらくの間視線を携帯のディスプレイに向けていたが、僕の姿を確認すると、携帯を折り畳んで深刻そうな顔をした。「全く授業が潰れてやる気が失せちゃったよ」

「……………」
僕は軽く冗談を言ったつもりだったが、高野の心の傷は僕の予想を遥かに超えていた。彼もこの異変に対して相当量のショックを受けていたのに違いない。しかし現実はいっかりと受け止めなければならぬ。

「…… F組、G組も全滅だった……」
僕はさりげなく言おうとしたのだが、動揺して声が震えてしまった。

「……うん……」
重苦しく気まずい空気が辺りを包んでいる。

——ヤバい。何とかしてこの場を盛り上げなくっちゃ——

「…… AからDも同じだった……」

沈黙。

「……でもさ、もしかしたら皆、そういうフリをしているかもしれないよ？ 沢辺さんも何か『変な奴が……』って言ってたし」

「……そうかな？」

「そうだよ！」

「うゝん……」

「………？」

「……じゃあ、他のクラス、行ってみる？」

「ああ！！」

僕と高野は他クラスの教室に行く事にした。

—— 誰かいるかなあ？——

僕は内心不安だった。

僕と高野はまずE組の東隣のD組に入った。ここには小・中と学校を共にした滝谷がいる。

E組の時と同様に教室に入る。無論教室内は静まり返っている。試しに右隅にいる生徒の体を思いつ切り揺らしてみた。普通なら何らかの抵抗があるはずだ。しかし反応は全く無い。

「こうなったら片っ端からやってくしか無いな」

僕と高野は教室にいる全ての生徒に強い振動を与えていった。しかし反応は全く見られない。滝谷の番になり、ぼくは滝谷の肩に手を掛けた。その瞬間、

「あ、ねぎポンじゃん」

滝谷が目を覚ました。僕は正直8割方諦めた気持ちでいた。しかしそれはとても愚かな事だった。僕は自分を責めた。

「滝谷君は今まで何やってたん？」

「気を取り直して僕が訊ねると、

「ずーっとぼーっとしてた」

「えッ?！」

僕が予期せぬ滝谷の言葉に啞然としていると、高野が

「どうしたの？」

と言ってやって来た。

「いや、ここにいる滝谷君っていう同じ中学の人がね、今までずーっとぼーっとしてたって言うんだよ」

「えーっ?」

しかし高野はあまり驚いた様子を見せない。

「あれ?何か思ったより驚いてないね」

「ああ。俺も携帯やってたから」

確かに。僕がE組に入った時、高野は携帯で暇を潰していた。抑えきれない思いを携帯にぶつけていたのだろう。僕には絶対にでき

ない事だが……。

「で、ここで一体何があったの？」

それを言った瞬間僕ははっとした。この事は高野にも訊ねていなかったのだ。滝谷は答える。

「俺が教室入った時はもうこんな感じだった」

「ああ。俺もそうだった。高野君は？」

「……俺もかな。でも俺が入った時はこんなに静かじゃなかったよ？」

「うん。実際F組、G組は普通に騒いでたし」

なぜなのだろう？確かに僕が教室に向かう途中、周囲は騒がしかった。高野もそう言っている。しかし滝谷は違った。彼は

「入った時からこうだった」

と言っていた。

——おかしい。おかしいぞ？——

僕は滝谷に疑念を抱いた。

「……という事は、滝谷君のD組も初めっからこういう風になってたって事になるよね？」

僕は滝谷に訊ねてみた。

「……………」

滝谷は黙ってしまった。

「どうなの滝谷君？それとももしかして何か凄い事でも起こったとか？」

「……実は俺、少し遅刻して来ちゃったんだよ。だから何も知らないんだ。ごめん」

「マジで？……でも何でそんな事今まで黙ってたん？」

「教室に入ったら先生がいなかったから『遅刻じゃない』って思ってたんだ。でもいつまで待っても先生が来ないからこの友達と話をしようとしたんだ。そしたら向こうは何の反応も見せないんだよ」

「えっ？久保田先生来なかったの？あの人D組の担任でしょ？」

「久保田先生」

こと久保田町子まちこはD組の担任で音楽の授業を担当している先生だ。僕もよく音楽の授業でお世話になっている。

「出張だったんじゃない？あの先生よく出張するから」

「うーん……。でもだとしたら副担任がいるじゃんか」

「ああそっかあ……。他クラスは普通にやってるのに。何で……」

「そんな事無いよ。だってここにいる高野君はE組の生徒だもん」

僕はうつむく滝谷に高野を紹介した。滝谷と高野にはどこか似ている所があるようで、2人はすぐに意気投合した。

「……で、滝谷君は俺達がここに来る前に何か怪しい人かなんかを見なかったかな？」

僕は滝谷に沢辺から聞いた

「変な奴」

の話をした。

「うん……。ごめん。見てない」

「そっかあ。滝谷君でも駄目かあ……」

「ホントごめん。力になれなくて」

「いいっていいって。遅刻した滝谷君なら知ってるんじゃないかって思ってただけだから」

「……それ、思いつ切りストレートに言ってない？」

「あ……」

高野のさりげないツツコミに僕は

「しまった！」

と思った。しかし滝谷は笑っている。僕はほっと胸を撫で下ろした。

「滝谷君は他に誰か知ってる人いないの？」

「……いない。皆このクラスだから」

滝谷は少し考えて言った。仲間は思うように増えていかない。

僕、高野、滝谷の3人はD組の残りの生徒を揺らし、滝谷以外の生徒の反応が無い事を確認した。その瞬間滝谷は頭をがっくりと落とした。

「まあそんなにがっかりするなよ。まだ俺達がいるだろ?」

僕は滝谷を元気付けようとした。

「……………」

しかし滝谷のショックは相当強かったのだろう。完全に参っている。

「……とりあえずさ、他のクラスにも行ってみようよ、滝谷君」

高野も援護する。

「……分かった。ねぎポン、どこに行く?」

滝谷がわずかではあるが気を取り直した。

「とりあえずE組からH組までの教室は全部チェックしたんだ。で、今回のD組だろ?残るはA、B、Cの3クラスだけだ」

「じゃあC組に行ってみよう」

滝谷の一声に僕と高野は賛成した。3人はC組へと向かった。

しかしC組にもその次に向かったB組にも、反応のある生徒は誰一人いなかった。

「はあ、あ。皆駄目だったね?」

僕は一つ溜め息を吐き、滝谷に言った。

「ああ」

「疲れたあ」

高野の言う通り、3人はこれまでに100人を超える生徒にショックを与えてきた。しかし誰一人として反応をする者はいなかった。ていうか先生どこに行っちゃったんだろう?さっきから全然見掛けないんだけど」

「そんな事どうだっていいじゃん」

高野は何かを追い払うかのように言った。高野は先生のいない事については別に何も考えていないようだ。

「うん……。そうかなあ？」

「A組、誰かいるかな？」

高野が言った。高野と滝谷はあまりの収穫の無さに半ば諦めを感じ始めているようだ。2人はB組の教室の床に座り込み、僕はその近くで立っている。

「まあ一応行ってみようよ。駄目でもともとだから」

「ねぎポンがそこまで言うなら……」

滝谷はゆっくりと立ち上がった。

「高野君も行こうよ」 滝谷の誘いに釣られるようにして、高野ものつたりと面倒臭そうに立ち上がった。そして3人はA組へと向かった。

A組。ここには小・中を共にした今津と部活の同じ長田、それに夏休みに行われた補習で知り合いになった野崎^{のき・ひろし}広がいる。果たしてこのクラスに“生存者”はいるのだろうか？期待と不安が頭の中に入り混じる。僕を先頭に3人が教室に入って行った。

「誰かいませんか？」 僕は小声で言った。

「ここも同じだね」

高野が教室内を見回して言った。このクラスの雰囲気もどこか暗い。僕も教壇に上がって室内を見回す。

「あれ？あそこに空席があるよ？」

僕は40ある座席の中に1つだけ空いている座席があるのを発見した。

「どうせ公欠か何かじゃないの？」

高野が言う。

「うん……」

僕は空席のある方向に向かって歩き出した。それに滝谷と高野が続く。

「……何だろう？」

僕はその席の前で立ち止まり、言った。椅子の上に女子がよく使うような可愛い柄付きのメモが1枚きちんと折り畳まれている。僕はそれを拾い、2人に同意を求めた。

「これ……、読んでもいいのかなあ……？」

「いいんじゃない？」

高野はやケクソになっている。もう何でも来いといった感じだ。僕はゆっくりとうなずき、メモを広げた。

「……じゃあ……読むよ？」

「……うん……」

僕は唾を飲んだ。滝谷も固唾を飲んで見守っている。

「『だれか助けてください！！』」

女子特有の細く角張った文字で走り書きされている。

「これ、この席の人の？」

滝谷が訊ねた。高野は隣の机に座ってぼーっとしている。

「ああ、多分ね。続けるよ？」

「いいよ、続けて」

「分かった。『今このクラスは大変なことになっています。なんか変な人がこの生徒から何か光るものを引っこ抜いているのです。そしてそれを抜かれた人は、ぬけがらとなってその場に放置されています。私は今からそいつの目をぬすんで教室から逃げようと思っていますが、もしかしたらつかまってしまいかもしれません。この手紙がだれにどんな形で読まれるかどうかは分かりませんが、どうか少しでも早くそいつを見つけてみんなを元にもどしてやってください。おねがいします!!』」

しばらくの間、教室内に沈黙が走った。それまでヤケクソになっていた高野もすっかりと机の上で固まっている。

「……これ、……マジかな？」

僕は思い切ってその沈黙を打ち破った。

「……そう思うしかないだろ」

滝谷の言う通りだと僕は思った。

「……この人、今どこにいるんかなあ？」

「……さあ？」

「……でもここにいないってことはどこかにいるって事なんじゃないの？」

「……それかそいつに連れ去られたとか」

「高野君、そんな事言つなよ」

僕が慌ててその言葉を打ち消そうとしたが遅かった。滝谷の余計な一言により、教室内に再び重い空気が漂ってしまった。しかしその中で僕はある矛盾点に気付いた。

「でも何か引つ掛かるんだよね。だってこの手紙に書いてある事が事実なら、沢辺さんの事はどうやって説明できるんだよ？」

「ああ、そう言われれば……」

2人はその事に気付いていなかったようだ。

「でもさ、この『光るもの』って何だろう？」

滝谷が訊ねた。

「うん……。あまり考えたくはないんだけど、もしかしたら魂なんじゃないかなあ？」

「魂……?!」

2人はうつむいてうなっている。

「そう。実際に魂なんてものがあるかどうかは知らないけど……」

「そんなものある訳無いじゃん。小説じゃあるまいし」

高野が冷めた調子で言う。

「まあね。第一そうだとしたら沢辺さんは何だっていう話だもんね」

「っていつかそんな事している暇があったらさっさと逃げろって感じだし」

「ああ、言えてるね」

その時僕の頭の中で何かが走ったような衝撃を覚えた。

「……こんな事考えられないかな？」

「何？」

滝谷が食い付いた。

「実はこの生徒は何らかの理由で休んだ。で、それに目を付けた犯人『変な奴』がもっともらしい内容をメモに書いて俺達のような生き残りをどこかにおびき寄せようとしてるんだ。字なんてものは簡単に真似できる。まああくまでも仮説だけどね」

2人共その思いもよらぬ発言に呆然としている。僕は続けた。
「本当はそうでない事を祈りたいんだけど」

「ねぎポン、これは罠だよ。俺達の行動が見られてる」

滝谷が小声で言った。

「うゝん……」

僕は考えた。僕としては何としてもこの手紙の主を捜し当ててその人を僕達の仲間に加えたいという所だが、滝谷の言っている事もよく分かる。

「じゃあいつその事行ってみれば？」

「……そうだね。じゃあ行こうか？」

高野のぶっきらぼうな態度に僕は一押しされた。3人はその他のA組の生徒に次々と衝撃を与えて行った。そして彼らの反応が感じられない事に溜め息を吐いた。その生徒の中に今津と野崎がいたが、長田の姿は無かった。僕と同じく小・中と同じ学校を共にした今津を発見した滝谷の反応は、冷静だった。

——あの席は長田さんのだな？——

僕は直感した。そして僕達の仲間が1人増える事を確信、先を急いだ。

僕と高野と滝谷は、A組の生徒の中で唯一席を欠いている長田を求めてA組の教室を後にした。

9時18分。僕達は階段を降りた。いつもは授業の時間帯なので廊下は物凄く静かだった。緊張の糸がピンと張り詰めている。僕達は2年生のいる3階をできるだけ足音を立てずに歩く。2年C組の教室が真つすぐ目の前に見える。

しかし結果は同じだった。

その後3年生のいる1階にも行ったが、やはり結果は同じだった。“生存者”は誰もいない。僕達は階段を上った。

2階。ここには職員室を始めとする沢山の部屋が並んでいる。僕達はまず職員室を訪ねた。

「失礼しまー……、あれっ？誰もいない」

僕は驚いた。職員室に誰一人として人がいなかったのだ。僕達が各教室を回っていた時、室内には硬直した生徒しかいなかった。僕達は事務室に向かう。しかしそこにも人はいなかった。

——なんでだ？先生ならまだしも事務の人達までいなくなるなんて——

事務室はガラス張りになっているので室外からもよく見える。しかし念の為僕達は事務室の中に入って行った。僕、高野、滝谷はそれぞれ別の場所を探索する。

——やっぱり誰もいないのかなあ？——

そう思った瞬間、僕達の近くでゴソゴソという物音がした。その音を聞いた僕はビクツとして胸が痛くなった。

「誰かいるんですか？」

僕は声を抑えて言った。物音はますます大きくなる。僕はその音のする方向に向かってじりじりっと歩み寄った。そして僕はとてもないものを目の当たりにする。

「……ええっ?!」

そこには目にアイマスク、口にガムテープ、手首と胴体をビニールテープでぐるつとまとめられた長田の姿が。

「長田さん……!!」

その声を聞いた高野と滝谷が駆け付けて来た。

「誰だよ。こんな事した奴は?」

「……あれ?この人……」

「放送部の長田さんだよ」

「ああ、道理で……」

僕と高野、それに沢辺と長田は共に羽生南高の放送部に所属している。

「っていうかそんな事より早くこの人を助けないと……」

僕と高野のやりとりに滝谷が突っ込んだ。

「あっ、そうだった。話に夢中になってすっかり忘れてたよ」

この一言によつて、今まで張り詰めていた緊張の糸がプツンと切れた。長田はその様子を察知したのか精一杯の声で助けを求め出した。しかし口にガムテープが貼られているので聞いている側は何を言っているのか全く判らない。

「長田さん、今助けるよ」

僕は手首と胴体に巻かれたビニールテープを解き、アイマスクを取つてあげた。しかし口に貼られたガムテープをはがす事には抵抗を抱いた。

「ゴメン。そのガムテープは自分ではがしてくんないか？」

手の自由が利くようになった長田は

「痛ッ！」

と言いながらもその自由の利いた手で口に貼られていたガムテープをびりびりとはがしていった。

「あゝ苦しかった。ねぎポンありがとう」

「そんな事無いよ。偶然見つけただけだし」

僕は長田に感謝されて少し照れ臭かった。

「あっ、そういえばA組の教室、あれは多分長田さんの席だと思うんだけど、そこに何かメモ帳が置いてあつたんだよ。あれ、長田さんが書いたの？」

僕は思い出したように言った。

「えっ？あの紙見たの？」

「うん。それがどうかした？」

「うん……。あれは何だつたんだろう？何か凄い……。見た目は普通の人間なんだけど……。もう思い出すだけで……」

長田は顔を伏せた。今にも泣き出しそうだ。

「……って事はあの紙に書いてあつた事は実話な訳？」

「……そう。何もかも、全て……」

「そうか……。でも何で長田さんはこんな所にいた訳？しかもあんな状態で」

「……私は人質だったの、あいつの……。だから私だけ一人生き残ったの……」

「えっ？！じゃああの手紙は……」

「他に生き残った人をおびき寄せせる為の罠……」

「くっ、そうだったのか。道理でそんな事ができる余裕があると思っただよ」

「そういえば、何でねぎポン達は生き残ってるの？あいつに遭わなかったの？」

「えっ……」

僕はこれまでの経緯を長田に話した。

「そう……。皆……」

「うん……」

僕は同調するしかなかった。高野と滝谷は黙ってその一部始終を聞いている。

「3人共早く逃げて……」

長田が声を震わせて言った。

「えっ？何言ってんだよ長田さん」

「いいから早く逃げて！！」

長田の鬼気迫る勢いに僕はたじろいだ。

「ちよつと待つてくれよ。例え今俺達3人がどっかへ逃げたとして、

……長田さんはどうなるんだよ？」

僕は肝心な所で長田の名前が出て来なかった事を後悔した。

「……………」

「第一もうその格好してる時点で駄目じゃん。普通に誰かが助けに来たって事がバレちゃうよ？」

「……判った。行けばいいんでしょう？」

「そうだよ。そうでなくっちゃあ」

長田は僕の説得にあっさりと応じた。

「変な奴」

を知らない僕達にとってこれは大きな前進につながる。僕は長田に訊ねた。

「……で、そいつって何者なの？」

「前にも言っただけど、見た目は本当に普通の人間。だけどやってる事が人間じゃない。あれは何て言ったらいいんだろ……………」

長田は言葉に詰まった。

「……でもとにかく凄かったんでしょ？あんなもん取り出して」

「それはね。あれは恐ろしかった……………」

長田は体を震わせた。

「っていうかそれって何なの？それを取って何の意味がある訳？」

「魂……………なんじゃないの？」

「うゝん……………」

「でもさ、魂なんて有り得るの？俺はそういうの信じないけど……………」
高野が言った。

「うん。そうなんだよ。俺もどうもそれが信じられなくなつてさあ」
「俺もそう思う」

僕の言葉に滝谷が続いた。僕と高野、そして滝谷は
「『霊』や『魂』は存在しない」
と思つてゐる。

「長田さんはどうなの？ やっぱり霊とか信じるの？」
僕が訊ねた。

「私は信じるよ。こういうの面白いじゃん」
「ふ〜ん……。まあいいや。とりあえずこれからどうするか考えよう」

しばらくの間、事務室内を沈黙が流れた。

「……長田さん、どこか行く当ては無いの？」
僕は言った。

「……分かんない。あいつ、どこに行つたんだろ？」
「それにこの人とか先生とかも、皆どっかへ行つちやつたみたいだしね」

「うん、そうだね……」
「でもこんだけ中回つても見つけれないんだからさ、思い切つて外に出てみようよ。何か見つかるかもしれないよ？」

滝谷が突然言い出した。

「一応俺は賛成だけど……。2人はどう思ってたんの？」

僕は滝谷と長田に訊ねた。

「俺は賛成だよ」

「私も」

「よしっ。じゃあ外に出てみつか」

高野達の反応は無かった。僕は傷付いた。

とりあえず僕達は昇降口を出た。9時36分。外は相変わらず暑い。僕達は体育館へと向かった。

「これって外に出なくても善かったんじゃない？」

長田の言った通り、体育館へは昇降口を出なくても校舎からの渡り廊下で行く事ができる。僕は無駄足をしたなと思った。

僕達は靴を脱いで体育館へ入った。中には誰もいない。

「ステージの方も行ってみようよ」

「ああ」

滝谷が言った。僕達はステージに上がってみる。しかしそこにも人はいなかった。その後館内のあちこちを捜し回ってみたものの、結局人を見つけ出す事はできなかった。

「次行く？」

長田が言った。

「うん。でも他に行くところある？」

「あるよ。隣の武道館とか」

「武道館」

とは、羽生南高にある剣道場と柔道場とがセットになった小さな建物である。

「よしっ。じゃあ武道館に行ってみよう」

僕達は武道館へと向かった。

武道館1階。中には畳が一面張り巡らされている。僕は1つ深呼吸

吸をした。

「根岸君……何だろこれ……？」

僕は声のする方へ振り向いた。柔道場の隅で高野が震えながら何かを指差している。

「どうしたの？高野君」

「何か……光ってない？」

「ええっ？！まさか？」

しかし高野の様子は尋常ではない。僕は高野の指差す先に目を向けた。

「なっ……。こんなやつてありかよ……」

僕は驚愕した。何とそこには光り輝く球のようなものが。

「……これ、あいつが引っこ抜いてた奴だよ……」

長田が言った

「え、えっ？！マジかよ……」

「つて事は、これ……」

滝谷が信じられないという顔をしながら言った。言葉が詰まって出て来ない。

「そう。これが魂」

僕は信じられなかった。こんな非科学的なものが実際に存在するなんて……。

「どうするよ？これ」

僕は言った。

「どうしよう……」

さすがの長田もこれには戸惑っている様子だ。

「長田さん、ちょっと触ってみてよ」

「嫌っ！高野君触って」

「えっ？そういう事なら滝谷君が」

「な、何言っただよ高野君。それを言うならねぎポンだろ？」

「はあ？結局俺かよ？」

僕は失望した。

「全く……」

僕はぶつぶつと独り言を言いながら恐る恐るその物体に手を近付けて行く。手がぴたっと触れた。

「うわあっ！！」

その瞬間、その物体は一瞬にして閃光を一面に放ち、僕達の目を眩ませた。

「うッ！！」

そして見る見るうちに形を変化させて行く。

「……は、畑部さん？！」

そこに現れたのは、僕と同じH組の畑部君子^{きみこ}だった。しかし畑部の姿は全身半透明である。

「長田さん、魂って半透明なんだね？」

僕が感心して訊ねる。

「……っていうか魂って本当は見えないはずなのに……」

「そんな細かい事はもうどうだっていいよ。畑部さん、これ一体どうなっちゃってんの？」

「……………」

畑部は何かを一生懸命に訴えているようだが、言葉になっていないので何を言っているのかさっぱり解らない。

「畑部さん？」

畑部は何かを指差している。

「んん？何だこれ？」

僕は畑部の指差した先にあつた長方形の小さな物体を手にとつた。それはリモコンのような遠隔操縦装置だつた。ボタンが沢山あり、使い方がよく判らない。僕が困っていると、

「ねぎポン、呼んでるよ」

と長田に声を掛けられた。畑部が何かジェスチャーをしている。

「……ん？今一解んないんだけど」

畑部は怒つてそっぽを向いてしまった。

「ヤベっ、ちよつと怒らしちゃったよ……」

僕はため息を吐き、装置を眺めた。装置の真ん中で大きな赤いボタンがドンと居座っている。

「……何だろう？これ……」

僕は試しにそのボタンを押してみようと思つたが、何か恐ろしい事が起こりそうな嫌な予感がしたのでやめにした。僕はその事を皆に伝え、装置の管理を長田に託した。

「……さて、これからどうするか……」

僕はまず

「なぜ畑部が喋られないのか？」

について考えた。しかし考えた所でどうなるといった訳でも無い。

——何でだろう……？——

僕がそう思っていた時突然滝谷が言った。

「何かバリアとかが張ってあったりして」

「バリア？」

「バリアで音が遮断されてるんだよ」

「そうか！なるほど……」

僕は長田の手から装置を取り返し、ボタンをくまなく見つめて行った。

「ん？これかな？」

僕は装置の左手前隅に“BARRIER ON/OFF”と書かれたボタンがある事に気付いた。僕は思い切ってそのボタンを押してみる。すると、突然畑部の回りに黄色いドーム状の壁が現れ、その直後それが少しずつ消えて行った。

「あっ！聞こえる！」

畑部の回りを取り囲んでいた見えないバリアが完全に消失した。その途端、畑部のマシンガントークが蜘蛛の子を散らすかの如く一気に炸裂した。その声がいまにもうるさく聞くに堪^たえないので、話の内容を要約しておく事にする。

畑部は

「変な奴」

から魂を抜かれた後、僕が持っている例の装置でコンパクトに。その後他の魂と一緒にまとめてゴミ袋へ。それはもうまるで鼻紙扱いだったそうだ。しかし

「奴」

も甘かった。ゴミ袋の底が破けて魂が大流出。その中のほとんどは「変な奴」

に拾われてしまったが、畑部は何とか生き延びた。もしかすると他

にも同じ境遇を味わい路頭をさまよっている
「もの」

がいるかもしれない……。

「うゝん……」

僕は考えた。皆の体から魂を抜いた張本人

「変な奴」

を探すか、それとも他の魂を拾って仲間をどんどん増やすか。僕は
滝谷に訊ねてみる。

「ねえ滝谷君、これからどうしたらいいと思う？このまま戦つか、
それとも人数をもっと増やしてからにするか」

「やっぱもっと人数を増やしてからの方がいいんじゃない？」

「やっぱり？俺も今そう思ってたところなんだよ」

他の3人も同じ意見だった。僕達は他の魂を求めて柔道場と2階
の剣道場中を捜し回った。しかし新たな魂を見つける事はできな
かった。

「次どこ行く？」

僕が訊ねる。

「あと残ってるのは校庭だけだよ？」

長田が言った。

「……だよねえ。……じゃあ行きますか。校庭へ」

「そうしよう」

滝谷が賛成したので高野もその意見に賛成した。高野は未だに動
揺している。

「校庭かぁ……」

僕はこの異変の規模が段々と広がって行く事に恐怖感を抱いた。

僕、高野、滝谷の男子3人と長田、畑部の女子2人は他の魂を求めて校庭へと向かった。しかし畑部は夏服に上履き姿なので、わざわざ靴を取りに行かなければならない。柔道場と剣道場では裸足になれば済んだ事だったが、外ではそうはいかない。畑部は上履きを靴に履き替える為、1人昇降口へと向かった。

畑部が他の4人と合流した時、4人は昇降口付近の森
「美波の園」みなみのその

と自転車置場を必死になって捜し回っていた。

「ポン、校庭を捜すんじゃないの？」

畑部が呼び掛けた。

「何かね、長田さんが携帯の占いで『今日のラッキーディレクションは北だ』って出たんだって」

「そうなの？長田さん」

畑部は長田へ近寄って来て言った。

「うん。これ結構当たるの」

「ふーん……」

畑部は携帯電話を持っていない。畑部は黙って作業へ取り掛かった。

「ねえ長田さん、全然見つからないんだけど……」

僕は言った。高野と滝谷は一緒に携帯で遊んでいる。

「……みたいね。じゃあやっぱり校庭に行く？」

「うん、そうだね。ただ校庭って広いなあ。何か漠然とし過ぎてるよ」

井の中の蛙かもしれないが、南高の校庭は結構広い。野球場を始め、サッカーコート、ハンドボールコート、テニスコート……。多くのコートがこの学校の校庭には敷き詰められている。ちなみにこの校庭は南高校舎の南に位置している。僕はまず東側のハンド

ボールコート・野球場周辺を

「野球班（男子）」

と

「ハンド班（女子）」

との2グループに分けて捜してみる事にした。

「どう？何かある？」

東ゴール（校門寄り）にいる長田が訊ねた。

「何も無いよ」

西ゴールにいる畑部が答えた。実際にそれらしきものは全く見当たらない。

「次行こうよ」

畑部はそう言ってハンドボールコートを抜け出して野球場へ向かってしまった。先程までいたその場所に魂が落ちているとも知らずに……。

その頃、

「野球班」

ではバックネット裏付近を入念に捜し回っていた。当初

「『魂』なんて存在しない!!」

と思っていた3人だったが、もはや信じざるを得なくなってしまうた。

「何か見つかった？」

僕が大声で訊ねた。

「何も見つからない」

滝谷が答えた。高野も同様だった。どうやら野球場周辺には魂は落ちていないようだ。

「どうする？次行く？」

滝谷が言った。

「いや、もう少し当たってみるよ」

僕は確かに見たのだ。バックネット裏の茂みで何かが光ったのを。僕はその茂みの中をさらに深くを目指して這^はって行く。しかし期待とは裏腹に、それを見つけ出す事はできなかった。

「おつかしいな？」

僕はそう言いながら顔中に吹き出た汗をハンカチで拭^{ぬぐ}った。僕達はネット裏の木陰で休息をした後、西隣にあるサッカーゴール周辺を探ってみる事にした。

3人で木陰に座っていると、女子2人が走って来た。

「ポン、どうだった？」

畑部が訊ねた。

「いや、まだまだよ。そっちは？」

「こっちも駄目。見つからなかった」

畑部は首を横に振った。

「……無いのかなあ？」

僕がつぶやく。ほんの一瞬空気が冷たくなった。

「……あれって何かに反応したりしないのかなあ？」

滝谷が遠慮がちに言った。

「反応？」

畑部が返す。

「……例えば何か電磁波みたいなものを出しているとか」

「なるほど」。それは気が付かなかったよ。滝谷君って凄いね」

「そりゃそうだよ。だって滝谷君はもととでできるんだもん」

僕は言った。

「そんな事無いって」

滝谷が表情を変えずに僕の発言を振り払った。その様子を見て高野が

「本当は嬉しいくせに」

と言っている。僕は左腕にはめられた腕時計に目を落とした。時刻はいつの間にか10時を回っていた。

——あれっ？さっきチャイム鳴ったかな？——

50分授業の場合、南高では9時50分と10時に1時限目終了と2時限目開始のチャイムが鳴る事となっている。しかし僕の耳にその音は届かなかった。

——いつもなら数学が始まってるって時間なのに——

僕は思った。魂捜しに夢中になっていたせいだろうか？それともチャイムを流す装置自体が何者かによって止められてしまったのだろうか？僕はその事を考えつつ近くの木の幹にもたれ掛かった。

「……ねぎポン！ねぎポン！！」

「……んん？……あ、ヤベツ。寝ちゃったよ」

皆に呼び起こされて初めて自分が寝てしまっていた事に気付いた僕。暑さの為か、制服の背中が少し濡れている。時刻は10時23分だった。

「何もたましてんの？置いてくよ？」

「お、おいちよつと待ってくれよ」

畑部に言われて僕は急^せかされた。僕達は南側のゴールの裏からバレーボールコートへ向かって歩いて行った。北側のゴールはハンドボールコートの西隣にある為後回しにした。

バレーボールコート周辺には何も変化が見られなかった。僕達は次に弓道場へ向かった。弓道場は一面芝生でできていて、広くも無く狭くも無い広場のような所だ。僕達は場内を散り散りになって捜索を始めた。すると長田が、

「あつ、織部先生^{おりべ}！！」

と言つてどこかへ走って行ってしまった。

「どうしたの？！」

畑部がそう言つて長田の許^{もと}へと駆け寄る。辺りの空気が緊張した。2人の後を追った先には生物の教師として僕達H組や他のクラスの生物を教え、僕達の所属している南高放送部の顧問をも務めている織部徹^{とおる}の姿が長田が人質となっていた時とほとんど同じ状態で放置されていた。

「あゝ助かった。皆ありがとうな」

女子の2人に助けられた織部は僕達に向かってお辞儀をした。

「お前ら大丈夫だったか？」

「大丈夫ですよ」

畑部と長田が口々に言つた。僕はこれまでの経緯を織部に話した。

「1限の授業で教室に入ったらさ、いきなり後ろからこの袋をかぶされたんだよ」

「そうだったんですか……」

僕は重要な情報が得られる事を心の中で願ったのだが、それは実現なかった。僕は落胆した。

「あれっ？これ何ですか？」

滝谷が織部のかぶっていた袋の中に1枚の便箋が入っているのを発見し、言った。

「何だろう？」

織部が便箋の中身を読む。そこにはワープロ文字でこう書かれていた。

『脅迫状』

南高は俺が乗っ取った。取り返したくば河川敷まで来い。 羽生

田TRYアングル（はにゆうだとらいあんぐる）『

「何それ？そのふざけた名前。これが犯人の名前なの？」

畑部が呆れ笑っている。

——『羽生田TRYアングル』？どこかで聞いた事あるなあ——

僕は思った。

「あの……先生、この名前どっかで聞いた事があるような気がするんですけど、何でしたっけ？」

僕は思い切って織部に訊ねてみた。

「『バーミューダトライアングル』か……。誠まことよく知ってたな？」

「『バーミューダトライアングル』……」

「バーミューダトライアングル」

とは、大西洋西部の英領群島・バーミューダ諸島―フロリダ―プエルトリコの3点を結ぶ三角海域の事だ。

「魔の三角海域」

とも呼ばれ、船舶や飛行機の原因不明の遭難事故が多発する事で恐れられている。原因説には諸説あるそうだ。

「……でも、『河川敷』ってどこでしょうね？利根川ですか？」

僕が訊ねた。

「……だろうな。この辺は」

織部は少し考えて言った。

「あッ……」

長田が突然大きな声を出した。

「どうしたの?! ながたん?」

畑部が言った。

「これ」

長田が弓道場の反対側の隅で何かを指差している。その先には2つの魂が仲良く隣り合う何とも不思議な光景があった。

「……あれ? 俺あの装置どこやったっけ?」

「えっ!? ポン、あれ持っていないと元に戻せないよ?」

「あッ! もしかして……」

僕は元来た道を走って行った。無我夢中だった。幸い装置は僕が寝ていたバックネット裏の木陰に置いてあった。僕はさっと装置を

拾い上げ、皆のいる弓道場へと向かった。意識が少し朦朧もつろうとして来た。

「おい誠、お前大丈夫か？少しふらふらしてるぞ？」

「あ、これ位大した事ありませんよ。多分今日のこの暑さのせいだと思いますから」

僕は織部の心配をやりわりと振り切った。今回も魂担当は僕となつた。

「誰が出るかな？」

僕はまず、左の方の魂に手を触れた。すると、G組の柿沼恵里香かきぬま・えりかが現れた。同様に右の方にも触れると、今度はH組の春川結花はるかわ・ゆいかが現れた。

「春川！柿沼！」

「織部先生！！」

2人は泣き崩れた。精神的に相当なダメージが与えられたんだろ
うなと僕は思った。2人が泣き止んだ後、僕はこれまでの経緯を2
人に話した。

「そうだったの……」

2人の様子はまさに

「青菜に塩」

だった。

「……まあとにかく2人共さ、元気出そうよ！」

「……そ、そうだよ結花！しっかりしなさい！」

僕と長田が2人をなだめる。ちなみに春川と畑部は南高放送部の一員。畑部はこの部の副部長でもある。

——春川さんの隣にいる、この人は一体？——

僕はそれまで柿沼との面識が全く無かった為、柿沼に何をどう言っ
てやれば善いのか判らない。しかしその疑問は畑部によって解決
された。畑部は柿沼に僕達の事を紹介している。

「あれ？根岸君ってホームページ作ってるよね？」

「えッ？！そ、そうだけど……？」

柿沼の突然の発言に僕は驚いた。

「……でも、何で俺がホームページ作ってるって事知ってるの？」

僕は柿沼に訊ねた。

「H組に藤本君ふじもとっているでしょ？その人に教えてもらったの」

「藤本君？でもH組には藤本ふじもとって人3人いるし」

「藤本光喜君」

「ふ〜ん……」

僕の言った通り、H組には藤本という名字の人が3人いる。スポーツ系の拓也たくや、生徒会所属の光喜、おっとりタイプの幸児しんじの3人だ。僕は勝手ながら柿沼と光喜との間に何らかのつながりがあると推測し、話を戻した。

「……で、これからどうするの？」

「利根川……行くの？」

春川が訊ねた。2人共幾らか平静を取り戻して来ている。

「いや、でも利根川って決まった訳じゃないし……」

「じゃあ他にどこがあるの？」

今度は畑部が切り込んで来た。

「ちょ、ちよつと待ってくれよ。俺はただ利根川が1番近いかな、
と思つて言つただけで、何の確信も無いんだから」

何だか国会の衆議院予算委員会のようになつてしまった。もはや
手に負えないと思つた僕は、近くの日陰で高野、滝谷の2人と例の
脅迫状について意見を交わし合っている織部へ助けを求めた。

「先生、助けて下さい」

僕は芝生に膝を落とした。

「何だよどうした？」

織部は僕の方へ振り向いて言つた。織部達は腰を下ろしていた。
僕もそこへ向かった。するとそれに気付いた女子も後から付いて来
た。皆の表情はどれもへばっている。

「あぢ」

女子4人が手をうちわにしてあおいでいる。

「先生、何か判りましたか？」

僕が訊ねた。

「ああ。こいつは手強い相手かもしれないぞ」

「はあ、そうですか……」

僕は今こんなにも身近な所でとんでもない事が起こっているという状況に頭がパニックしている。

「どんな感じで手強いのか？先生」

春川が訊ねた。

「まず、ここに書いてある脅迫状。『河川敷』がどこの事だかわつかめない。それに、この名前。羽生の事を知り尽くしている可能性がある。これは完全にこっち側が不利だ。残念だけど、今の状況でお前らに勝ち目は無いよ」

「そんな……」

織部の表情はいつに無く真剣だった。僕達は失望するしか無かった。

「ねぎポン、ねぎポンは羽生の事判らない？」

滝谷が訊ねた。

「あ、ああ。まあ判んない事も無いけど。羽生に住んできた事もあるからね……」

「そつなんだ！へえ」

柿沼が驚いた。

「いや、でもあつちの須影とか手子林の方なんかはさっぱり判んないし」

「……そついえば沢辺は羽生だよな？」

織部が思い出したように言った。

「あ、そうでしたね！……でも沢辺さん今いないんだよね……」
沈黙。ミンミンゼミのつんざくような鳴き声が響き渡る。

「でも、何で絃美だけ違うの？他は皆魂が張本人によって抜かれて
いるのに……。何で?!」

春川が声を震わせた。

「……っていうか春川さんと畑部さんは見てないの？同じクラスで
しょ？」

「誠、そう責めるな。まだ心の準備ができてないんだろ」

「くッ……」

僕は織部に食って掛かろうと思ったが、思うに止まった。

「……ごめんね。ねぎポン。私が学校に着いた時、まだ皆は来てな
かったの。その時は普段通りだったんだけど。でもそれから少しし
た時にその『何とかトライアングル』？が出て来て、皆の魂を吸い
取って行って……。あれはもう地獄……。その時私と君子は死んだ
ふりをしたんだけど、バレちゃって……。多分後から来た他の人達
もそうやって『何とかトライアングル』の餌食になっちゃったんだ
と思う……」

春川は途中すすり上げながらそう言った。

「じゃあ何で沢辺さんは違うパターンだったんだよ？」

僕が春川に言葉を返したその時、

「根岸君、もしかしたらその沢辺さんって人、生きてるかもしれない
だよ？」

今まで僕達の話に黙って聞いていた高野が突然口を開いた。

「えッ?!」

僕はその事に気付かなかった事を情け無く思った。

「戻ろうよ。教室に」

春川と畑部が口々に言った。僕達は再び教室へと向かった。

1年H組の教室の様子は少しも変わってはいなかった。畑部、春川、長田の3人は、真っ先に沢辺の許へ駆け寄った。沢辺は机に上半身を任せていた。意識は無さそうだ。

「絃美！絃美！！」

畑部達が呼び掛ける。しかし沢辺は目を覚まさない。そこで何を思ったのか、春川が突然教室後方にある掃除用ロッカーからほうきを1本取り出し、沢辺の後頭部目がけてほうきを振りかぶった。そしてそのほうきを力一杯振り下ろしたその時、

「てああゝ！！」

沢辺がくるつと振り向き、ほうきを両手で受け止めた。その瞬間、時間が止まったような錯覚を覚えた。

「……さ、沢辺さん？」

僕は言った。その予期せぬ出来事に皆啞然としている。

「そつだよ？絃美でえゝす！」

「……あれがねぎポンの言つてた『沢辺さん』って人なん？」

滝谷が来て僕に耳打ちをした。

「あ、ああ。確かに沢辺さんだよ……」

柿沼以外の女子は素直に沢辺と溶け込んでいる。しかし僕はどうしても納得がいかなかった。

——おかしい……。何でなんだ？！——

そう僕が思っていたまさにその時だった。

「沢辺、お前大丈夫なのか？誠に言わせれば、お前気絶してたみたいじゃないか？」

僕の体は織部の言葉に鋭く反応した。チャンスと思った僕は、そ

の答えを耳を澄ませるようにして待ち構えた。

「キゼツ？……あああれ？演技！」

「演技い？！」

その瞬間、僕は今日の前にいる人間が沢辺本人ではないと確信した。

「誠、沢辺は本当に死にかけてたのか？」

織部が訊ねた。

「はい、間違いありません。確かにそうでした」

「先生、これって……」

柿沼が恐る恐る訊ねる。そう思っていたのは僕だけではなかったようだ。

「有り得ない事だけど、偽物かもしれないな」

それを聞いた皆が一斉に耳を傾けた。

「何言ってるの先生？そんなの無いに決まってるじゃん」

沢辺が反論する。

「違う……。絃美じゃない……」

春川と長田が言った。この言葉が決定打となったのか、沢辺はついにその化けの皮をはがし始めた。

「……バレちゃしょうがないね」

「お前は一体?!」

僕は沢辺の偽者におどおどしながらも強い口調で訊ねる。

「ま、使者みたいなもんかなあ」

「使者? そんなの別に普通の格好でやればいい事じゃなか。何でわざわざ……?」

「こうしないとねぎポン達と話せないし、抵抗があると思って……」

「別にそんな事考えなくてもいいよ! かえって何て言えばいいか解んなくなっちゃうし」

「簡単に言つと私はこの体を借りてるって事。だからこうやって皆の顔も名前も解るしフレンドリーに接する事もできるって訳」

「つまり沢辺さんの脳から情報を受け取ってるんだ?」

「そういう事」

「ふん……。でもそうなると呼びにくいなあ。どうしよう?」

僕にはどうしても実感が湧かなかつた。外見が沢辺だからだろうか? 多分他の皆もそう思っているに違いない。

「何て呼んでほしい?」

春川が偽者に訊ねる。

「さあ? 何とでも言つて」

偽者は冷たく言い放つた。

「ねえ、皆は何がいい?」

僕は皆に訊ねた。

「『ウコン』でいいよ……」

春川が笑いを隠し切れない様子で言つた。その他

「ひよろみ」

等といった案も出たのだが、結局春川の言つた

「ウコン」

というニックネームに決定した。

「ところで、あなたは敵なんですか？」

織部がウコンに訊ねる。

「敵です」

「ええッ?!」

即答だった。皆の視線がウコンに集中する。

「奴の狙いは一体何なんですか？」

僕はウコンに訊ねた。

「……さあ？私はただあなた達を河川敷の所へお連れする事だけを指示されたものですから」

「ウコン」

というニッケームが気に入らなかったのか、ウコンはここに来て業務調を使うようになった。

「絃美は助かるの？」

春川が訊ねた。

「それも解りません」

「行くしか無いんじゃないか？」

織部が言った。

「そうですね。……その『河川敷』ってどこ事なんですか？」

僕は今までずっと気になっていた事をウコンにぶつけた。

「『福川^{ふくがわ}』です」

「福川?! 福川のどこですか？」

僕は驚いた。

「それは……」

ウコンは言葉に詰まった。

「福川ってどこにあるの？」

皆が僕に訊ねる。

「福川っていうのは行田ぎょうだの北の方にある利根川の支流なんだけど、中学の時に死体が流れ着いたっていうんで有名になった川なんだよ。知らない？」

「知らない……」

「あ、そう……」

皆に言われて僕は傷付いた。

「さて、じゃあどうやってそこまで行くか？」

「先生、とぼけないで下さい。先生の車で行けばいいんじゃないですか」

「どうやって行くんだよ。こんなに人入らないぞ？」

「大丈夫ですよ。コンパクトにすればいいんです」

「コンパクト？」

「この中にいる9人のうち、3人は魂です。それを利用すれば車になんか簡単に入れますよ。まあ論より証拠。早く乗りましょう」

1人首を傾げている織部をよそに、僕達は駐車場へと向かった。

織部の車は四輪駆動の大きいものだった。

「これなら全員乗り切れるな」

僕は言った。皆は車内に押し込まれるようにして入って行く。

「皆入ったかあ？」

織部が訊ねた。

「はい……」

後部座席は寿司詰め状態。苦しい。助手席には案内役のウコンとその腕に抱かれた小さな籠かごが。籠の中にはコンパクトに丸め込まれた3つの魂があった。無論織部とウコンはきちんとシートベルトを締めている。

こうして、各生徒からのブーイングを受けながらも、車は目的地・福川を目指して走り出したのだった。

僕達のいる羽生南高校から福川へ行くには、学校の近くを通る国道122号線を何キロメートルか北上し、県道59号線（羽生妻沼線）へ。北河原きたがわらの交差点を右折すれば福川はすぐそこだ。織部は福川めぬまの堤防上で車を駐め、僕達は車を下りた。川を越えると妻沼町だ。……でも何でこんな所に犯人がいるんだよ？」

僕は呟いた。

「皆さん御苦労様でした。では私はこれで……」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。せっかくここまで来たのに一緒に行かないの？」

「すみません。一緒に行きたいという気持ちも山々あるのですが、これは任務なもので……」

そう言ってウコンは走り去って行った。

「あゝあ。行っちゃった……」

僕は放心状態だった。

「ウコンン！！行かないでえ〜！」

春川達女子が呼び止めたが、ウコンが戻って来る事は二度と無かった。

「どうしよう……」

春川が言った。時刻は11時半を回っていた。僕達は落合橋おちあいばしの手前で車を下り、織部の愛車は付近の空き地に駐められた。皆福川の堤防斜面でぐつたりとしている。

「あれっ？あいつはどうした？」

織部が訊ねた。実は織部が来たのはウコンがいなくなった後の為、織部はこの事を全く知らないのだ。

「行っちゃいました……」

春川が答えた。その後をつなげるようにして畑部が経緯を説明、織部は落胆した。

「……あれッ？誰か来るよ？」

僕は堤防の上の砂利道を遙か水門方面から走って来る1人の人の姿を発見して言った。

「ええっ？ただのジョギング中のおっさんなんじゃないの？」

畑部がかつたるそうに言った。

「そうは見えないみたいだけど」

柿沼が言った。

「誰だろう……？」

僕は目を凝らした。僕達へ向かって何か叫んでいる。聴き覚えのある声。しかし何と叫んでいるのか判らない。その姿が段々と大きくなっていく。

「あッ！あれ西原君にしはらじゃない？！」

僕は言った。高校野球部ならではの丸坊主頭、人懐っこい雰囲気、速い足。間違い無い。1年H組の西原雄大ゆうだいだ。しかし沢辺のように

「ウコン」

のパターンで来る場合もある。僕はそう心に言い聞かせ、西原に臨んだ。

「西原君 どうしたの？よくここが解ったじゃん」

見ると、西原の姿は半透明だった。僕はとりあえず安心した。西原の息は荒く、汗が滴り落ちている。

「ねぎまこ……今逃げて来たんだ」

西原の言った

「ねぎまこ」

というニックネームはH組のほとんどの男子が僕に対して使っている。しかしその一方で畑部達の言う

「ねぎポン」

や

「ポン」

といったニックネームを使うのは小・中学校時代の友達や南高放送部等一部の生徒のみ。中学校を卒業するまでの間あんなにメジャーだったニックネームが高校に入って一気にマイナーに……。僕は最初

「ねぎまこ」

というニックネームに対し強烈な嫌悪感を抱いていたのだが、今ではもうすっかり馴染んでいる。

「……ちよつと……休ましてくんない？」

西原は堤防の芝生に倒れ込んだ。僕がこれまでの経緯を説明する。

「えッ？……俺『ウコン』に会ったよ？……何か……悲しそうな顔してたな……」

西原はウコンに僕達のいる場所を教えてもらったらしい。11時40分。太陽が真上に来ていた。

「じゃ、行こうか？」

僕は言った。西原の回復は予想以上に早かった。僕は西原が走って来た道を歩いて行く。

20分程歩いただろうか？僕は西原がいたと言う福川水門に到着した。

前に僕が言ったように、数年前ここで人間の遺体が発見されたという事件が起こった。中学時代の友達でこの周辺に住む米田和也よねだ・かずやの話によると、当時この周辺ではヘリコプターが飛び交っていて、おまけにテレビ局のインタビュアーが情報を求めて米田の家まで訪ねて来たなんて事もあったのだそうだ。

「あちいゝ、腹減ったあゝ。ねぎまこお、今金持ってるうゝ？」

西原が力無さそうに言った。しかし僕は手ぶらのまま来てしまった為お金は持っていない。西原は他の皆にもお金を求めている。織部が持っていた。

「この辺コンビニとか無いの？」

畑部が言った。

「あるっちゃあるよ。でもまた結構歩く事になるけどね」

それを聞いた女子が車を駐めて来た織部を徹底的に非難する。僕はその様子を見てある事に気付いた。

「……ていうか第一その格好で入られたら店の人びっくりするんじゃないかねえか？」

「……………」

魂である畑部達は黙ってしまった。

「先生、何か飲み物買って来てよ」

西原が言った。

「しょうがないな。でもコンビニってどこにあるんだ？」

「あ、この辺でしたら僕の出身地みたいなもんなんで」

織部の問いに僕は答えた。

「じゃあ誠、一緒に来てくれ」

「解りました」

織部と僕は堤防を下りて近くのコンビニへと向かう。

「……先生、あそこに皆を置いてきちゃっちゃまずいと思うんですけど」

僕は少し勇気を出して言った。それを聞いた織部がはっとして言う。

「……しまった！戻ろう！」

幸い2人と皆との距離は短かった。2人は堤防を駆け上がった。そこに皆の姿は無い。

「おおーい！皆いるかあー？」

焦った織部が叫ぶ。すると時間差があって幾つかの弱々しい声が返って来た。織部は胸を撫で下ろした。

「よかったあゝ……」

織部のその言葉に僕も安堵した。僕は今度は皆を連れて近くのコンビニへと向かう。

僕達が堤防を下りてしばらく歩いていると、最後尾を歩いていた滝谷が先頭に立って歩いている僕の許へやって来て突然こう言った。「そういえば、さっきの川の所にこんなのが落ちてたんだけど」

滝谷はズボンの右ポケットから紙を取り出し、僕に手渡した。紙は小さく折り畳まれていた。僕はその事情を聞き付けた皆に事情を伝え、紙を開いてみた。

「えゝつとゝ……？」

そこにはやはり活字体で以下の事が書かれていた。僕は声に出して読んでみる。

「『諸君

よくここまで来れたな。誉めてあげよう。しかし時間切れだ。

我々は次なる目的地へと向かっている。君達にその場所が解るかな？ すぐに来ないとまた出発してしまうぞ？ すぐに！ 羽生田TRYアングル……何だよこれ？！読みづれえゝなゝ。

……解ったよ、解いてやろうじゃねえか！」

僕はキレ気味に言い放った。

「ちよつとそれ貸して」

畑部が言った。僕はその“挑戦状”を畑部に手渡した。畑部は意外にもあっさりとその問題を解いてしまったらしく、僕に訊ねた。「ねえポン、この辺に『横塚バス停』ってバス停あるの？」

予想だになかった質問に僕は一瞬面を食らった。

「……あゝああ。あるけど……」

「じゃそこだよ。『横塚バス停』、今すぐ行こう！」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ。何でそこだって解るんだよ？」

畑部の話の流れに飲まれそうになった僕は、畑部に食って掛かった。

「簡単じゃん。スペースで区切られた文の頭を読んでみなよ」

「んん？ちよつと見して」

僕はその紙を手に取り、畑部の言った通りに読んでみた。

「……よ……こ……つ……か……ば……す……て……い……。あ、
本当だ！！『横塚バス停』だよ！」

僕は驚いたと同時に畑部に問題を先に解かれた事に対してかなり大きな心の傷を負った。

「どうする？先に行っちゃう？」

僕は言った。

「……でもどうやって行くの？車置いて来ちゃったんだよ？」
畑部が言った。

「うゝん……」

僕は悩んだ。

「バスに乗って行けば善くね?」

「そうか! その手があったか。バスの中なら冷房が効いてて涼しいしね」

西原の画期的な提案に、僕は西原に尊敬の念を抱いた。

「誠、この辺で一番近いバス停ってどこだ?」
織部が訊ねた。

「この辺でしたら市の循環バスの『北河原小学校前』が一番近いと思います」

僕が答えた。

「よし、解った。じゃあそこへ行ってみよう。誠、案内してくれ」

「はい」

そのバス停まではそう遠くはなかった。僕はバス停に到着すると、そこにあるバスの時刻表に注目した。

「うわッ、やべッ。このバス次停まるの14時33分だよ」

僕は失望した。このバス停から目的地の横塚バス停へ行くには市内循環の北循環左回りのバス

「ふれあい号」

に乗らなければならない。しかしそのバスは14時半を回らないとそこへはやって来ない。僕達はバス停の歩道へへたり込んだ。

「どうするの?」

畑部が言った。

「さあ?」

僕はもうどうでも良くなっていた。

「先生、車乗って来て下さいよ」

畑部は織部に言う。

「……そうだな。じゃあ誠、一緒に来てくれ」

「……え? いや他の皆も連れてかないと……」

「あ、そうだったな」

織部はそう言って皆を取りまとめた。皆汗に塗れてかつたるそうに歩き出した。

こうして僕達は再び落合橋に到着した。そして再び織部の車に乗る。車は県道59号を東へと進んで行った。

横塚バス停へは10分程で到着した。

横塚バス停。

その周辺はいかにも昭和な、田舎情緒溢れる独特の雰囲気漂っている。中学時代の写生会で校外の風景を描く課題が出た時、僕はその横塚に住む石野友紀と一緒に石野の裏の道でラジオを聴きながらのんびりと絵を描いていた事があった。絵を描く事をサボって石野の家でテレビを視ていた事もあった。回りの先生が回って来て、その先生がそんな2人の様子を見て呆れていた事も……。それ以来僕と石野とは友情の糸でつながっている。僕はその事を思い出し、中学時代の郷愁に浸っていた。

「で、奴はどこにいるんだ？」

西原が元氣良く言った。車内の冷房で皆の体調は完全に回復している。

「どこだろ……？」

僕は辺りを見回した。時刻は午後1時3分。学校にいれば昼休みという所か。僕は制服のズボンの右ポケットから携帯を取り出して石野にメールを送ってみた。

『羽生南高が大変だ！！』

今羽生南高が大変な事になってる。信じられないかもしれないけど、ほとんどの生徒の魂が抜かれてるんだよ。それでその犯人が横塚のバス停の所にいるって事になって今そこにいるんだけど、見つからないんだよ。どうしたらいい？』

すると1分程して石野から電話がかかって来た。僕はその電話に出る。

「はい根岸です」

『おお、ねぎポン。何だよさっきのメール？』

石野は僕を完全に疑っている。

「本当なんだって。何て言うんだろうなあ……」

僕が返す言葉に窮していると、西原がその様子に気付いて僕の許へとやって来た。

「ねぎまこ、どこに電話してんだ？」

僕は突然の横槍に思わず驚き、携帯の送話口を薬指と小指で覆いかぶせた。

「うわぁッ！あ、中学の時の友達だよ。丁度この辺に住んでるんだ」

「へえ」

西原はそう言い残し、再び歩いて行った。僕も再び携帯に向かう。

『誰？さっきの人』

「ああ、高校の友達だよ。ま、厳密に言うとその魂なんだけどね」

『え？ちよっとお前さっきから話してる事がさっぱり解んねえよ。俺にも解るように説明してくれ』

僕は送話口の向こうの石野にこれまでの経緯をよく噛み砕いて話した。

『ふ〜ん……。何か凄く大変な事になってんだな……』

「うん、まあね。でも正直俺も今何が起こってんだか全く解んねんだよ」

『……………』

「……………で、これからどうしたらいいと思う？」

『……………そんな事言われてもなあ……………』

「……………そつかあ……………。解った。悪いね」

『こつちこそ、何もアドバイスできなくて……………』

「そんな……………。じゃあね」

『ああ、じゃあね』

そう言って石野との電話は切れた。そんな時、バス停付近で

「羽生田TRYアングル」

発見への手掛かりを搜索していた皆の口から、突如大歓声が揚がった。

「どうしたの？」

先手を取られた形となってしまった僕は、携帯をしまい、皆の許へと急いで駆け付けた。

「こんなの落ちてたんだけど」

西原が言った。その手の上には小さくかわいらしい男の子の人形が乗っている。

「何だろう……？」

僕はその人形を眺めた。どこにでもあるような普通の人形だ。

「あれッ？これ何？」

春川は人形の腹を指差した。見ると、その部分には服のボタンが3つはめられていて、その中の一番下のボタンが少し大き目に造られている。

「ここなんか押してみたりして」

僕は一番下のボタンを押してみた。すると、人形の中から歯車の回る鈍い音がして、人形がぎこちない動作で動き出した。僕は驚き、思わず人形を手放してしまった。

「あゝあ」

その瞬間、皆の声が一気に溜め息へと変わった。歯車の音が止まってしまったのだ。その事をしゃがみ込んで確かめた僕に皆からの文に換え難い程の囂囂たる非難が矢のように突き刺さって行く。僕は悲しくなり、沈み込んだ。しかし、

「あッ！！動いた！」

長田が言った。人形は自ら動き出し、うつぶせになっていた体を持ち上げ始めた。そしてそれが終わると軽く礼をし、突然喋り始めた。

「今日ハ」

「喋った！！」

皆が驚く。

「私ハ、アナタ達へノめっせんじゃーデス。コレカラアナタ達ヲ案内致シマス」

「『使者』って訳か……」

織部が呟いた。

「デハ、コチラへ」

そう言うのと、人形は歩き出した。

「……遅ッ！」

少し経って僕は言った。

「私が持つよ」

春川が言った。人形は春川の腕に抱えられ、言葉でナビゲートする形となった。

人形のナビゲートによって連れて来られた場所は、広大な水田地帯だった。人形はそこまで来ると春川の腕を離れ、路面に着地するとロケット花火のように真上へ飛び上がり、青空で軽い音を立てて爆発した。

「………」

しばらくの間沈黙が流れた。

「……来た」

長田が気配を感じ、静かに言った。皆一斉に緊張し、西原は身構えた。

「……よく来たね。待ち構えたよ……」

「……誰だ!？」

西原が言った。すると遙か前方から拡声器を持った男が猛烈な勢いで走って来た。

「我こそは、『羽生田TRYアングル』! にしづめ・まろめ西崎勝だ!」

「羽生田TRYアングル」

こと西崎は、声を張り上げて言った。

「……何か地味な名前だよね……」

女子達がひそひそ話をしている。

「うるさいうるさいうるさーい！！俺の名前にケチを付けるなー！」
それを聞いた西崎は持っていた拡声器を地面に叩き付け、憤慨した。

——何だコイツ？ある意味普通じゃねえぞ？——
僕は思った。

「おいッ、西崎！！皆を返せ！」

西原の調子には怒りがこもっている。このぶつかり合いはまだまだ続きそうだ。

「それはできないね」

「なぜだ？！」

「俺は別にこの高校に恨みがある訳じゃあない」

「だったらどうしてそんな事するんですか！？」

畑部も強い口調で言う。

「そんな事どうだっていいだろ？！」

西崎が逆ギレした。全く話が噛み合っていない。

「畜生！！何なんだよコイツ！？」

西原の怒りも頂点に差し掛かっていた。それは僕の周囲にいるほとんどの人達に言える事だった。しかし、この2人だけは違っていた……。

「そこだ！」

「やったー！完全制覇！！滝谷君、ありがとう！」

高野と滝谷はそんな事とはお構い無しに、何と道端にへたり込んで携帯のゲームをしていたのだ。無論、怒られるのは必至。

「そこッ！何をやってるの！？」

早速畑部に怒られた。その後雨あられのように2人に降り掛かる

怒号。織部はプレイヤーの高野とアドバイザーの滝谷の携帯を揃って没収した。

「……じゃあお前の目的は何なんだよ?!」

気を取り直して西原が訊ねる。

「俺の目的はな……根岸誠!!お前を倒す事だ!」

「……は?」

西崎に指を差され、僕は一瞬強烈な衝撃を受けたような気がした。僕は西崎の言葉に心当たりのある出来事を思い出そうとした。しかしそれに該当するものは無く、なぜ西崎が僕を倒そうと思っているのかが全く理解できなかった。

「大丈夫。ねぎまこは俺が守るから」

「西原君……」

僕は嬉しくなった。そして僕の心は西原への感謝の気持ちで一杯になった。

「よっしゃ行くぞ〜!」

西原が野球部の練習の時のような声を揚げ、西崎に殴り掛かった。西原の右ストレートが西崎の腹部に直撃、西崎はうめいた。

「いけ〜!!西原く〜ん!」

女子達が応援する。

「く……。力で解決しようなんて卑怯じゃないか。ここはひとまず話し合いで……」

「隙^{すき}あり!!」

西崎が喋り終わる間も無く西原の拳は西崎へ向かって飛んで行く。西崎はそれをゆらりとかわすと、落ちていた拡声器を再び手にし、柄のスイッチを押した。すると、拡声器の口から沢山の魂が飛び出し、西崎を取り巻いた。

「お前ら!! 根岸を倒してしまえ!!」

西崎は僕を指差し言った。沢山の魂が僕に向かって飛んで行く。僕は身を屈め、頭を両手で覆った。

「ねぎまこ!!」

西原の絶叫。その時、何か呪文のような声が僕の背後から聞こえて来た。

「あッ! 魂が……!!」

春川が言った。魂が僕の回りから去って行く。

「……あれ?」

何が起こったのか知る由も無い僕は呆然。散って行った魂は西崎へ向かってUターンした。

「うわああああ!!」

西崎は魂の餌食となった。

「何だよ。『トライアングル』も大した事ねえな」

力を持て余して西原が言う。

「……でも何か拍子抜けしちゃうよね」

春川。

「ていうか魂つてももの擦り抜けんじゃないの?」

僕はそう言ったが、やはり喜びには換えられない。

「でもさ、あの時の呪文って誰が言ってたの? あれが無かったら俺

どうなつてたか分かんなかったよ」

僕はその事がずっと気になっていた。

「善かったじゃん、ながたん」

春川が長田の肩を軽く叩いた。僕は長田の内なる能力に驚き、何
度も感謝した。

「……さて、これからどうするか？」

頃合いを見計らつて織部が皆に訊ねた。

「……俺はもう帰りたい……」

滝谷がぼそぼそと言った。滝谷の家はこの比較的近所に位置し
ている為、滝谷のその気持ちが僕には解った。僕の家も歩いてこそ
行けないものの高校とは正反対の方角に位置している。その為歩い
て帰った方がもしかすると早いのもかもしれない。そう思ったからだ。
しかし滝谷の願いはあっさりと消し去られ、あっけなく散って行つ
た。ふと西崎の方を見ると、西崎の回りには沢山の魂が西崎を取り
囲んでいる。

「俺が悪かった！皆元に戻してやるから勘弁してくれよ」

西崎が必死になつてその魂達を説得している。しかし魂達に容赦
は無かつた……。

西崎はその後魂達に道端の小石をぶつけられたりしていた。

「……畜生……！……まだまだだ……！」

西崎は残りわずかとなった体力を懸命になつて振り絞り、言った。そして拡声器を震えた手でつかみ取ると、それを杖代わりにしてよろよろと立ち上がった。西崎の頭に引っこ抜かれた雑草が飛んで来る。

「まだやるか？」

西原は高らかに言った。

「……くッ……おのれ、たかが魂の分際で……！」

西崎は汗と泥に塗れた顔を右腕で拭った。しかし西原達魂はそれを完全に無視。西崎の怒りのボルテージは徐々に上がって行く。

「……こうなつたら……仕方ねえ……」

西崎はそう呟くと、後方数m先に停められているバイクの許へと向かつて行った。西崎がやって来た時に乗っていたバイクだ。青が重く輝き、そして大きい。西崎はバイクの所で何やらごそごそとやっている。そしてそれが終わると、西崎は何とあのラバーカップ（いわゆるトイレのキュッポン）を出して来た。西崎の移動手段と思われるあの大きなバイクとは対照的に、ラバーカップの方は何といつてもシンプル。白い柄に黒いゴム。定番だ。これが強力な武器となるとは見た目上とても思えない。一体西崎は何をやらかすつもりなのかと僕が首を軽く右へ傾けた瞬間、長田と春川がほぼ同時に叫んだ。

「ポン！！あれには気を付けて！」

「……へ？」

2人の突然の絶叫に、僕は後頭部に小石がこつんと当たったかのような軽い衝撃を受けた。

「ふぬけてる場合じゃないよ！あれが私達の体と魂を分離した道具

「なんだから！」

「……あれが？」

「……もついいよ！あいつに魂でも抜かれちゃえ！」

「あゝあゝ解ったよ」

畑部に忠告されたものの、どうしてもあの道具の力が信じられなかった僕。実際現場を見ていないのだから仕方が無いといえは仕方が無いのだが。畑部達魂はその西崎の道具の怖さが理解できるのかもしれないが、僕や高野、そして滝谷のような被害を被っていない人間とすれば、あの道具はただのトイレ用品とでしか捉えようが無いのだ。

……しかしその気持ちはその後一瞬にして変わって行くのだった。
「……根岸……。どうやらこれが信じられないようだ……。解った……。じゃあこの道具の威力……。發揮させてもらおうじゃねえか……。！」

西崎はそう言うのと、ラバーカップのカップの方を天の方角へ向けて持ち、そしてさらにそれを薙刀なぎなたの構えの如く持ち替えた。カップの口は明らかに僕の心臓を狙っている。僕の胸の鼓動は今まで生きて来た中でも類を見ない程の物凄い勢いで滅茶苦茶に高鳴っている。

「おおおりゃあ〜!!」

西崎は僕へ向かって突進する。僕はそれをさっとかわした。

「あれを食らうとどうなっちゃうの？」

僕は長田に訊ねた。

「魂が引っこ抜かれちゃう」

「……マジで？」

「うん。マジで」

「うっわ……」

2人との会話が続いているその間も、西崎はひるまずUターン。再び突っ込んで来た。しかしそれも呆気無くかわされ西崎の息は切れ切れに。西崎のその間抜けっぷりに、僕達の戦意は確実に下がって行った。

「……何やってんだ？コイツ」

滝谷が吐き捨てた。すると、西崎は滝谷を横目でにらみ付けると衰弱し切った体をよろよろとさせながら再び愛車の許へ。今度は何と掃除機を出して来た。

「……さっきまではこの『ぺったん君』を使っていたが、これでは全く意味が無かった！今度はこいつで勝負だ！根岸！」

西崎は拡声器を使って一気に言くと、真っ先に崩折れてしまった。これでは戦いも締まらない。

「……ったく……」

西原は小さく放った。西崎は体力を蓄積しているようだ。

——でも掃除機ってコンセントが無いと動けねんじゃねえのか？

僕は掃除機の致命的な欠点に気が付いてしまった。僕は皆にその事を話してみる。

「……そうだよねえ。なるほど！っていうかあれ学校で使えばよか

ったのに……」

春川がそう言って吹き出した。西崎は怒りたいのを必死でこらえている。

「よっしゃー！！体力回復！」

西崎は勢い良く立ち上がった。活力が先程の何倍もみなぎっている。

「そうそう！そうで無くっちゃ試合は面白くねえよ！」

西原も余裕の構えだ。

—— 凄いよ西原君。幾ら相手がああだとはいえ、一応体力は消耗しているはずなのに——

僕は西原のスタミナ力に驚異を抱いた。

「来い！西崎！」

「言われなくても行つてやらあー！」

西崎は掃除機のスイッチを入れた。掃除機が音を立てて動き出す。

「……ねぎまこ、掃除機全然動いてるんだけど……」

「……あれ？」

「それって充電式なんじゃないか？」

「ああー！」

織部の一言に西原と僕は納得した。

「……って今それ所じゃねえじゃん！」

僕はツツコんだ。

「おらおら〜！一気に吸い込め〜！」

掃除機の吸引力は予想以上に強かった。

「山椒は粒でもぴりりと辛い」

とはよく言ったものだ。目の前の舗装路面がもこつと隆起し出す。すると路面はみるみるうちに凸凹となつて行く。それだけではない。それまで西崎の回りを常時取り巻いていた魂達も、その威力には勝てず、掃除機の餌食となつてしまった。そのすさまじい光景に、僕は戦慄した。

——強え。こいつとてつもなく強えよ。これじゃあ西原君なんか一溜りも無えじゃん——

魂が簡単に吸い込まれてしまうという事は、西原や畑部達といった“魂軍団”にとつて、あの掃除機はかなりの脅威となるはずだ。

——くッ、一体どうすりゃいいんだよ！——

僕は頭を抱え、悩んだ。打開策が見つからない。先頭に立っている西原。明らかに危険だ。そう思っていた矢先、今まで踏み止まっていた西原の両足がじりっじりっとな動いて行った。

——ヤバイ！——

そう思った僕は、まず西原達を抑え付けようと努めた。しかしそんな努力も虚しく、西原は吸引口へと吸い込まれて行ってしまった。

「西原君！！」

皆が叫ぶ。しかし西原が戻つて来る事は無かった。

——このままじゃ皆がやられちゃう。何とかしなくちゃ——

僕は後ろを向いた。そこには織部、高野、滝谷、そして長田がいる。しかし畑部達魂の姿は見えない。

「先生、畑部さん達はどうしたんですか？」

僕は訊ねる。

「ああ、ここにいますよ」

織部はどこで拾って来たのか、中身の沢山詰まったスーパーのビニール袋を指差した。そこに丸め込まれた魂が入っているのだろう。長田が大事そうに抱えている。

「よしッ、これで魂の危険性は無くなった。あとは何とかしてあの掃除機を撃破するかだ」

僕はそう自分に言い聞かせた。息がいつの間にか切れ切れとなっている。確実に体力が吸い取られている証拠だ。あの掃除機にはそんな力も持ち合わせていたのだ。

——畜生！どうすれば……——

僕は目の前で岩肌となった路面を見た。

——無駄な事かもしれないけど……——

僕は岩肌から小石を取り出し、掃除機へ向かって投げてみた。

「痛ッ！」

僕が掃除機目がけて投げた小石は少しそれて西崎の左肩に当たった。西崎は反射的にその肩を右手で覆う。その瞬間、西崎の手から掃除機の持ち手が離れた。

「今だ！！！」

「何ッ？！」

僕は西崎の一瞬の隙を逃さず、掃除機の操作権を一気に奪い取った。

「よゝっし！形勢逆転だあ！」

僕はそう言っていると、掃除機の中からピンポン球と化した西原の魂を取り出し、吸引口を西崎の方へと方向転換した。

「うわあゝ！やめろおゝ！！！」

西崎が絶叫する。しかし掃除機の吸引力は衰える所を知らない。依然として西崎を吸い込もうとする掃除機に、西崎は腹ばいで対抗した。腹ばいをする事によって、掃除機の吸引に対する的は西崎から見て前方に位置する掃除機の吸引口にとってかなり小さいものとなる。だが、この作戦には大いなる欠点が存在していた。

「甘いッ！！！」

僕は西崎目がけて突進し、彼の目前で止まった。そして吸引口を西崎の背中へ向けると、西崎はじたばたとふためき始めた。

「そっちが90度傾けるんなら、こっちも同じように90度傾かせればいいんだよ！」

「……詰んだな」

この“決戦”の模様を後方でじつくりと観ていた滝谷がやって来てそう言った。この先西崎がどうあがこうと、この吸引口からは逃げられない。立ち上がった瞬間にその口を西崎の背中へと向ければそれで良いのだから。

「観念したか、西崎!？」

西原が言う。

「ま、参りました……」

西崎は腹ばいのまま降参した。辺りから一斉に歓声が揚がった。

僕は掃除機のスイッチを切り、もう二度と使えないように吸引口を道端の泥でパンパンとなるまで詰め込んだ。

「よしッ、これでもう掃除機は使えないだろう。さあ、問題はこの人だ」

僕は西崎をチラッと見た。西崎は堂々としているフリをしている。

「さあ、早く皆を元に戻しやがれ！」

西原は喧嘩腰の強い口調で言った。西崎はその口調に完全に怯えている。皆が西崎の回りをぐるっと囲んだ。

「……それは、できません……」

「なぜ？」

西原。

「だって本体が無ければ元に戻すも何も全然できないじゃないですか！」

西崎が震える声でまくし立てる。

「うん。確かにそれは一理あるな」

織部がうなづいた。

「じゃあまた学校に戻っちゃうんですか？」

畑部が織部に訊ねる。

「そうなるな」

織部は答えた。沈黙が流れて行く。

「……ところで、あなたの目的って一体何なんですか？」

頃合いを見計らい、僕はどうしても訊ねておきたかったこの事について、西崎へぶつけてみた。すると西崎は腹ばいの状態からガバツと起き上がり、あぐらの姿勢となって派手に驚いた。

「はあ？お前知らないのか？」

西崎にとつて、この答えはかなり意外だったのだろう。西崎の上半身がのけ反っている。

「はい。だって僕、全く身に覚えが無いんです」

記憶の糸を一本一本と丁寧にとどつて行つてみても、それらしき節は全く見当たらない。

「……教えてやろうか？」

西崎はもったいぶった様子で僕ににやつとした嫌な笑みを浮かべた。

「ええ、お願いします……」

僕はその笑みに対して胸がムカついたが、その気持ちを何とか自分で押し殺し、表情が引きつり、唇を震わせながらもきつちりと西崎の問いに応答した。

「覚えてないか？あれは確か去年だったかな。皿洗いやってた頃だから。家でちよつと一悶着あつてな、しばらくの間親戚のいる京都で居候する事になつちまつたんだ……」

「うんうん」

西崎の話に皆も食い付いて来ている。予想外の展開に驚いた西崎は、姿勢を正し、言葉遣いを改めて、さらに話を続けた。

「で、その親戚の家が旅館をやつてたんですよ。またこれがすごく小せえ旅館なんですけど。まあ小さいとはいえ、名目上は旅館なんですから、あちこちをきれいにしておくのは当然じゃないですか。だから一応お礼につて事で、部屋をきれいにしたり色々してたんです。そしたら急に呼び出しがかかったんだ！『団体のお客様がいらつしやつたから、夕飯のお料理を作つてくれ』つてな！俺はそんなマジで飛び上がったまうんじゃねえかつて位嬉しかった。居候で下働きばかりの俺に、夕飯調理のオファーが舞い上がつて来たんだから」

「……………？ちよつと待つて下さい。その話、今回の件とどう関係があるんですか？」

僕は延々と身の上話を続ける西崎に、待つたをかけた。

「誠、人の話をよく聴け」

それに対し、織部が優しくなだめるように、且つ有無を言わせぬ厳しい口調で制する。

「それでもうつろいき気分で厨房へ行っただんです。俺料理はあまりした事が無かったんですけど、旅館の人に『上手じゃないの!』って言われて……！考えてみれば、あの時が俺の頂点だったのかもしれないな……」

独り言のようにつぶやく西崎に、畑部が訊ねる。

「その『料理』って何だったんですか？」

西崎は強く低い、恨みを込めた厚い声で答えた。

「すき焼き……」

一瞬僕の脳裏を卵掛け御飯がよぎって行った。

「調理の一切を任された俺は、とにかくがむしゃらにやった。俺の魂と熱意のこもったすき焼き鍋……。それをお前はあゝ!!」

その瞬間、僕の記憶と西崎の記憶とが完全に一致した。

2003年5月下旬。南高へ入学する事となる半年以上も前の事。修学旅行中京都の旅館に宿泊した我が中学校同年の生徒達。その中の1日目だっただろうか、夕食にすき焼きが出た事があった。しかし肉・魚の苦手な僕はそれを拒み、すき焼き肉にける生卵を御飯へ。石鍋を囲んですき焼きをおいしそうに食べる友達を尻目に、僕は卵掛け御飯とおかずのたくあんとを交互に細々と食べていた。

——まさか!?!——

僕の直感は的中した。西崎がその話をする、それまで黙って話を聴いていた皆が一斉に西崎を非難した。

「たったそれだけの事かよー!」

西原。

「どうしてポンがすき焼きを食べなかった事が判ったんですか？」

長田。

「そんな事で私達まで巻き添えになるなんて信じらんない!」

柿沼。

「……………」

西崎はしおれた。その後、西崎はしばらく口を開かなかった。長田の疑問も晴れず……。

「皆、戻るぞ！」

ゆったりと時が流れ、少しして織部が言っと、いつの間に暑さでへたり込んでいた皆がのっそりと立ち上がった。西崎は乗って来たバイクに乗って、僕達は携帯でタクシーを呼び、タクシーに乗って再び福川の落合橋へと戻って行く。そして織部の車に乗り換え、後ろに西崎のバイクを従えて、羽生南高校へ。時間はそれ程からなかった。

14時36分。南高へ到着。

「着いたぞ」

織部がそう言っ、て車のドアロックを解除したが、皆暑さを嫌って外へ出たがろうとしない。織部はカーエアコンを切り、捕虜状態となった西崎に協力を要請、嫌がる生徒達を無理矢理外へ追い出して行った。

校舎内へは別々の組が別々の入口を使って入って行く。

「暑い」

まず片方の組・“生徒組”は暑さによりよろとなりながらも昇降口を通った。靴を脱ぎ、上履きに履き替える。畑部が

「早く職員室に行こうよ」

と言ったので、その言葉に従って校舎の西階段を上って行く。涼を目前とした女子達の足取りには、戦いの疲れ等が微塵も感じられない。僕は1つ深い溜め息を吐いた。

その一方で、もう片方の組・織部と西崎の“大人組”は2階東側の玄関を通り抜けてひっそりとした廊下を歩いていた。今回の一連の事件について、例え警察に本当の事を話したとしても、警察は絶対に信じてはくれないだろう。それどころか“精神異常者”としてのレッテルを貼られてしまう。織部は西崎と並列になって歩きながらふとそう思った。

「おい、お前ここの人間をどこへやった？」

しかし今はこの場の状況回復が先。織部は西崎を脅し、先生方や生徒の魂の居場所を吐かせようと試みた。

「……5階の視聴覚室って所へ行って下さい。皆そこにいますから……」

西崎が言った。弱々しい、トーンの低い声。肉体的にも精神的にもかなり参ってしまったている状態が妨げ無く脳内へと伝わって来る。

「そうか。迂闊^{うかつ}だった……」

5階はまさに死角だった。実際僕達も今回の搜索中に5階へは行っていない。が、ここで織部の頭上にとある疑問が浮上する。

「お前、そんな事よく知ってるな」

「一応ここのOBですから」

西崎は即答した。しかしその言葉に“羽生南高校出身！”といっ

た誇りの気持ちが一切感じられない。織部は視聴覚室へ向かうと同時に西崎の過去についても少しずつ掘り下げてみようと思った。

その頃生徒達は職員室前にいた。

「入ってみる？」

職員室前一番乗りの畑部が訊ねる。

「いいんじゃない？」

西原。

「解った。じゃあ開けるよ？」

この畑部のいつに無く慎重な面持ちに、一体どのような意味が込められているのだろうか？僕にはそれが全く理解できなかった。

ガチャツという音を立てて、押し戸式のドアは開いた。室内は冷房が点けっ放し。しかも人間は依然として生徒達以外誰もいない。それを良い事に、畑部を始めとする女子達が一斉に涼み出した。

「はあ……。まったくこんな大事な時だつづうのに何皆くつろいでんだよ……」

僕はその光景を見て気が重くなった。ゆつたりとくつろぎたい気持ちはよく解る。正直寝てしまいたい位だろう。僕は午前中に一度寝てしまったのでそれ程疲労は蓄^たまっていなが、最初から行動を共にしている高野や滝谷にとってはかなりの負担となっているに違いない。

——ま、皆には色々頑張ってくれたし、今そんな急ぐような時でも無いからな——

僕はそう自分に言い聞かせ、

「一刻も早く！」

とはやる気持ちを抑え付けた。

5分後。

「……ってこんな事してる場合じゃないんじゃないの?!」

畑部だ。その突然の雷に跳ね上がる皆。畑部の言う事言う事あらゆる所に刺^{とげ}がある。その威力、魂となれども一向に衰えず。この“刺”に僕が何度傷つけられた事か……。畑部は今後へ向けての新たな策を僕に募った。

「ねえポン、これからどうするの?」

「うーん……」

沈黙。

「……!じゃあとりあえず、魂になつてる人は実体になつてまた戻つて来てくれないか?」

この僕の提案に対し、魂側からはかなりのブーイングが。しかし僕は諦めなかった。

「いいのかよ。本当にそのまま。もしかしたら今頃皆の体、腐り始めてるんじゃないんだぞ?この暑さと朝からの時間を考えれ

ば、今が一刻を争う、大げさに言えば生きるか死ぬかの境目なんかもしならないって事だつて、皆解るはずだろ？……俺はあんまそういう『魂』だとか『心霊現象』みたいなのは詳しくねえから実際何とも言えないけど、でもある意味生物学的に考えれば、腐ってるって可能性だつて決して無いとはい切り切れねえんだぞ？だから早く行って、一人でも多く人を助けなさい！」

今僕が言つた事は、実際には起こり得ない事なのかもしれない。長田が何か言いたそうに口をもごもごとさせていたが、僕はそれに全く気が付かなかった。

「だつたらもつと早く言つてよ！」

“刺”がまた一本、僕の胸に突き刺さつた。

「畑部さん……」

西原の声掛け虚しく、畑部はいまだ目を三角にして怒っている。

「君子、行こ！」

春川が畑部を促した。

「……………」

畑部は何も言わなかった。魂達が職員室を出て行く。その時なぜか僕は魂達の後について行きたいという軽い衝動に駆られた。

——上がってみようかなあ。4階へ——

僕がそう思っていると、長田が突然立ち上がった。こう言った。

「……ポン、4階、一緒に行ってみない？」

決定打だった。僕はそれにさりげなく賛成、2人はあつという間に階段を上り切ってしまった。

僕と長田が教室に到着した時、魂達は教室の窓側に集まって話し合いをしていた。

「ん？皆何やってんの？」

僕は魂達へ訊ねた。

「お、ねぎまこ！いい所に来てくれた。今どうやったら体に入れるか、実験してたんだよ」

西原が困ったように答えた。

「ああなるほどね！……で、一応何か試してみたりはしたの？」

「やってみたけどダメだった」

「全部？」

「全部」

西原は僕の問いに対してさらりと答えてくれる。その口調にどこかさわやかさが感じられた。

「長田さん、どうすればいいと思う？」

僕は“その道のプロ”である長田に訊ねてみた。

「それは多分こうするんじゃないかな？」

そう言つと、長田は春川をコンパクトにし、春川の体の口を開けるとそれを口の中へ押し込んだ。すると何とまるで眠りから覚めるかのように体が起き上がったではないか！

「やったあゝ！大成功！」

僕は純粹に喜んだ。長田はその他の魂にも同様に術を施して行く。しかし長田にとって異性となる西原には僕が施した。幸いどの体にも腐敗は進んでおらず、僕達はほっと胸を撫で下ろした。

「じゃ、早く職員室へ戻ろうよ。高野君と滝谷君が待ってるから」
「そうだね」

春川が答えた。畑部は実体となつて重さを余計に感じるようになつた事に違和感を抱いているようだった。

職員室へ戻るとすぐさま会議が始まった。

「どうする？」

議事進行役の畑部、皆に意見を求める。

「織部先生は今どこにいるんだろっ？」

僕はふとそう思った。

「あッ、私織部先生の番号知ってるよ？」

「マジで?!」

春川の突然の発言に、僕は不意を突かれた。

「かけてみる？」

「……うん……」

僕は少し考えてからうなずいた。春川が携帯で織部を呼び出す。

『おお、春川どうした？』

受話口からはいつも通りの織部の声が聞こえる。

「先生、今どこにいるんですか？」

『ああ、今視聴覚室にいるよ。西崎も一緒だ』

「視聴覚室ですかあ?!」

春川はかつたるような声を出した。

——視聴覚室?——

しかし、僕の耳は春川のその言葉に機敏に反応した。

『そつだ。そつちは今どこにいる?』

「職員室です。皆椅子に座って涼んでますよ」

『そうか。じゃあそんな所でくつろいでないで、早く皆をこつちへ連れて来るように言っておいてくれ。やる事が一杯あるからな』

「はいはい!ではこれからそちらへ向かいまゝす!」

そう言つて春川は電話を切った。春川が織部の指令を皆に伝える。さらなる移動に不平の声も揚がるかと思つたが、もはやそれを口にする者は1人もいなくなつていた。僕達は尚も歩き出す。

職員室から視聴覚室まではかなりの距離があつた。僕達のいた職員室は2階廊下の西側突き当たりに位置し、織部達のいる視聴覚室は最上階である5階の東端に位置している。ちなみに2階東端には玄関と事務室、5階西端には音楽室がある。

視聴覚室の扉は重く閉ざされていた。西原がその扉を開ける。

「……………?!」

そこには何と職員室にいるはずの先生方や事務室にいるはずの事務員の方々、そして数十個はありと思われる沢山の黒いゴミ袋が。

「織部先生、これは一体……?!」

僕や畑部は真つ先に織部の許へ駆け寄つた。

「後で説明するから」

投げ遣りに答えた織部の手から、僕に大人の胴体程はある、大きな目のゴミ袋が乱暴に手渡された。重量は外觀程無い。

「……で、これをどうすれば……？」

「とりあえず外へ出しといて」

「解りました……」

僕は渋々ゴミ袋を室外へと運び出した。皆にも袋は手渡された。

「……何でこんな事しなくちゃなんねんだよ……」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら僕は吹き出す汗をひたすら拭き取る。15時11分、全ての袋を運び出し、僕達は再び織部に訊ね直した。織部は皆にお詫びをし、織部達がこれまでしていた事についてゆっくりと話を始めた。

織部が西崎の言う通りに視聴覚室へと歩いて行くと、室内には人質となった職員と事務員、そしてその奥のステージ手前の隅には黒のゴミ袋が何袋か。織部はまず驚き目を見張ったが、すぐに冷静となり、「人質」の救助作業へと手を運び始めた。縄に縛られガムテープに口を塞がれていた「人質」達。彼らは救助後、織部に加勢した。

一方、ゴミ袋はかなり手強かった。袋の中には無数の魂。職員間のネットワークを駆使し、生徒1人1人をクラスごとに分別して行く。気が遠くなり、意識がどこかへ飛んでしまいそうになる。それをひたすら振り落とし、作業一点に集中する。職員の頬を幾筋もの汗が伝って行った……。

「その作業が終わった時に、お前らがこのことやって来たんだ」
織部はそう言うのと室外へと無造作に放り出されたゴミ袋の山をしばらくの間遠い目で見つめ続け、最後に僕達へ“片付け”の指令を出した。

「……よし！早く皆を甦らせるぞ！」

「はいッ……！」

僕達は快く承諾した。

「生徒への愛情表現」

の名の下、各クラスの担任または副担任がそのクラスの袋を持ち、各教室へ。ただし1年H組の場合は生徒が何人も生存している為そのような配慮は無用。職員の1人に伺ってみた所、担任の河西はいつの間に運び出された搬送先の保健室のベッドの上で今も気絶を続けているのだそうだ。

階段を降り、僕達は所属クラスごとに分裂した。僕が4階の廊下を歩いていると、袋をぶら下げて前を歩いていた西原が突然言った。
「っていうかさ、これ本当はあいつ1人でやったんじゃないや

ね？」

「まあ確かに1人じゃかなり厳しいもんがあるかしんねえもんね」

僕は西原の意見に賛同した。あの大仕事を行うには、少なくとも3人は必要だろう。

「絶対に裏があるよ、ねぎまこ」

「ああ……」

しばし重い沈黙が廊下を流れた。

H組の生徒が教室に到着、室内で西原が袋の中身をぶちまけた。その中身の持つ光に目を眩ませながらも4名の生徒が1人1人の“蘇生”を地道にこなして行く。途中“実体”となってそれを手伝う人が1人増えまた1人増え……。こうして1年H組にどのクラスよりも早い平和が再び訪れたかのように思えた。しかし、

「あれッ？　そういえば紘美はどうなったの？」

春川がふと思い出して言った。

「ああ！！」

僕ははっとした。僕は早速春川に頼んで織部へ連絡、沢辺の体の居場所を訊ねてもらった。

「『職員室にいるから来て』だって」

春川が通話を切って言った。

「OK。じゃあ行つて来る」

そう言つて僕が教室を出ようとした途端、クラスの女子生徒全員が「私達が行く」

等と言い出し事態は混乱。結局僕は半強制的に押し退けられてしまった。

女子達が職員室へ行っている間、残りの男子生徒達は教室内で遊んでいた。お喋りをする生徒、カードゲームをする生徒、漫画を読む生徒……。ここにいつもの1年H組が再び戻つて来つた。今日一日、僕達が汗し戦つて来た事がまるで夢・幻のように……。

数分後、河西が女子達を連れて教室へ戻つて来た。集団の中には沢辺の実体としての姿もあった。生徒は全員席に着き、河西の話を素直に聴く姿勢となった。その瞬間、教室内のスピーカーから読経が流れ始めた。西崎の声だ。

——なるほど。今回の事が事だから、やっぱりお被^{はら}いか何かした方がいんだらうな——

僕はこの読経をそう軽く受け止めていた。しかし、それは甘い考えでしか無かった。実はこの経文、耳にした者を即刻眠りに落とすてしまうという恐るべき“御利益”を持っていたのだ。僕は両耳を両手で覆い、嵐の過ぎ去るのをただ一心に待ち続けた。

何分待っただらうか？　教室内に充満していた読経が突然途切れた。

僕は両手を離し、恐る恐る周囲を見回す。再び訪れた静寂。音はいえただだ耳に入って来るばかりの寝息だけだ。僕は立ち上がり、放送の発信源を探しに走った。

職員室。生徒同様職員も皆熟睡していた。

——西崎は？——

僕は室内東側を注視した。

「あッ、いた！」

東側にある大きな黒板の下、少し南寄りの所に西崎はいた。経文を右手に持ち、黒板下の書類棚を背もたれにして「」の字になって寝ている。僕は西崎の手から経文を取り出し、経文を一から眺め回した。

「あつたあ！！！」

経文の最終ページに経文の効能が明朝体で記されていた。

「『この経文をほんの少し聞くだけで、不眠症なあなたもぐっすり快眠！！一度眠りに落ちたら最後、約15分間は起きられせん！！（個人差があります）』……何だこれ？」

どうやらこのようなものが通信販売か何かで売られているようだ。僕は耳栓をしなかった西崎を愚かに思いつつ、教室へと引き返した。

教室に到着すると、皆がのっそりとはあるが続々と起き上がって来ていた。僕は起きたばかりで放心状態の坂橋に、これまでの僕達の活躍を一部始終語り続けた。しかし坂橋は信じない。しかもおかしい事に坂橋は

「今まで普通に授業を受けていた」と言うのだ。

——記憶が書き替えられてる！それもさっきの15分間で！——僕は直感した。

恐らくあの経文の副作用としてこのような記憶違いの症状が現れてしまうのだろう。だとすると物凄く悲しい。僕は抵抗を感じながらも西原、畑部、春川の3人を無理矢理起こし、廊下へ連れて行って記憶が書き替えられているかどうかをテストしてみた。あの強い記憶は書き替えられなかったのだろう。あいまいな所こそあるものの3人共記憶を残してはいた。

「そんなのってありかよ……」

西原が悔しがる。

「ねえ、そういえばウコンはどうしたの？」

春川が言った。その瞬間、僕の心は懐かしさに包まれた。

「あッ……！！ていうかウコンって結局誰だったの？」

それは僕の素朴な疑問だった。

「それよりも西崎が何だって話だよ。あんな機械？持ってるなんて凄いいし」

西原が重ねる。僕の疑問は一瞬にして打ち消されてしまった。

「うん……。ちよつと俺職員室行つて来る」

しかし、職員室に西崎の姿は無かった。駐車場に駐めてあった西崎の愛車も消えている。僕は仕方無く引き返し、その事を廊下にいる3人に伝えた。

「くっそぉ、逃げられたぁ」

僕はとても悔しかった。これでは今日起こった事が帳消しとなってしまう。そう思うと、僕の全身から全ての気力と体力と何かがガラガラと音を立てて落石雪崩のように崩落し、目の前360度が一気に真っ白になった。

それから数分後、河西が目を覚まし、僕は正気を取り戻した。

――畜生！――

僕は所定の座席に着いた。今日の記憶は学校規模で完全に書き替えられてしまったようだ。

その後西崎の消息を知る者は、誰もいない……。

あれから既に9ヶ月が経つ。

今年もまたあの暑い季節がやって来た。

僕は今日もいつも通り何の変哲の無い授業を何の変哲も無く受けている。周囲には身を机に委ねている生徒が何人かいるが、教壇の教師はそれに構わずただ朗々と声を張り上げ、黒板に文字を書き続ける。生徒の静寂。僕はそれを感じ取った時、ふとあの日の光景を思い出す。魂の抜かれたあの教室の、あの蒼白に満ちたすさまじい程の光景を。

今日も暑くなりそうだ……。

完

Vol. 47 終局 9（後書き）

記念すべき第1作目。約3ヶ月間の執筆にひとまずピリオドが打たれました。どうでしたか？ここまで読んで下さっている愛読者の方々、本当に感謝感激です。全47Vol.!!まさかここまで続くとは当初作る側の僕も全く予想していませんでした。スランプに陥った事もありました。しかし何とかそれを乗り越え、今回の「あとかき」へと到達する事ができました。これも一重に愛読者の皆様のお陰です。このような雑文を読んでもいただき、本当にありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9637a/>

“異”・日常的風景

2010年10月8日15時30分発行